みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

# アジア読本モンゴル



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2012-02-29<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 小長谷, 有紀<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | http://hdl.handle.net/10502/4582 |

# ふるさと

◉遊牧生活の舞台

# 草の海の白い港

小長谷有紀

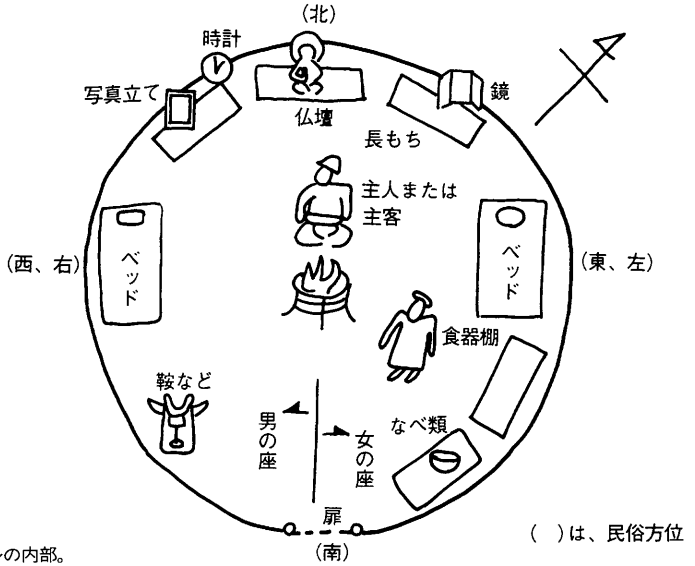
## ◉天幕の構造

ゆるやかにうねる緑の絨毯（じゅうたん）に、白い点がぼんやりと見える。少し近づくと、白い点は先のとがった形をとりはじめる。さらに近づくと、白い点は複数に分解し、しだいに天幕の形状があらわれる。数個の天幕の周辺には、ウマをつないだ駒つなぎや、ウシに曳かせる小さな車、それに牛糞を集めた山なども見えはじめる。いかにも郷愁をさそうがごとき、宿営地のたたずまい……これが、遊牧の暮らしの舞台である。

ユーラシア大陸に展開するさまざまな遊牧民の住居は、その多くがテント形式の天幕である。ユルトや包（パオ）という名でよく知られているが、モンゴル語ではゲルという。モンゴルの天幕は、白いヒツジの毛を固めて作ったフェルトを用いており、底辺は円形である。同じように白くて丸い天幕であっても、カザフ族の場合は、屋根を形づくる棒の部分（垂木（たるき））を湾曲させて背高いものにしているのに対して、モンゴルの場合は垂木が直線的で比較的低い。したがって、ゲルは「白くて、丸くて、低い」という特徴をもっている。

ハナとよばれる壁は、格子状に木を組み合わせて作られている。ジャバラ式になっており、折り畳むことができる。木と木を結ぶにはラクダの革ひもウデールが用いられる。格子壁を円形に並べてゆくと家の骨格ができあがる。ハナはほぼ一定のサイズであり、その枚数によってゲルの大小を表現することができる。五枚がほぼ平均的である。壁と壁を結ぶにはウシとウマの毛をよったひもボールトを用いる。

格子壁の下端を、ぐいと地面につきさして立てる。上端にはオニとよばれる棒を配して屋根に相当する部分を形づくる。ハナ一枚にたいてい一二本のオニが載せられ




ゲルの内部。

るようになっている。あらかじめもちあげておいたトーノとよばれる天窓に、オニを挿し込んでゆく。壁と棒を結ぶには、ウシとウマの毛をよったひもサガルダルガを用いる。

このトーノをもちあげておくために、バガナとよばれる柱のような棒を用いる。火の場所の脇に二本立ったバガナは、まるで大黒柱のようだが、構造的には屋根を支えているわけではない。中国内蒙古自治区では、ほとんどバガナが見られない。そこでは、かすがいを用いて天窓トーノに直接、屋根棒オニを取り付けておき、傘のように広げられるものが普及している。工夫されている分だけ、重くなる。モンゴル国にバガナが残っているということは、天幕の分解度の高さ、すなわち各パーツの軽さを意味し、同時に遊牧移動がさかんであることを意味するといえよう。

こうした木製部分には、たいていカラマツが用いられており、ボルガスとよばれる柳を用いると、より軽量に仕上がる。

木製の枠組みができあがると、外側をフェルトで覆う。フェルトは、壁にまきつける部分トールガと、屋根を覆

う部分デーベルと、天窓を覆う部分ウルフに分けられる。さらに全体を覆う布はブレースとよばれる。

このように、ゲルはいくつもの部分に分解できるように考案されている。移動のたびごとに、分解しては立て直すことが、メインテナンスにもなる。

ゲルの内部にしきりはないので、いわゆるプライバシーを保つのは難しい。しかし、孤独なら、草原で十二分に満喫することができる。人知れず泣きたければ、草の海へと駆け出すがいい。ゲルはプライバシーを確保するというよりも、人がつどうところである。緑の海原に点在する港のような結節点なのである。

**◉天幕をめぐる空間秩序**

ゲルはたいてい南東ないし南南東の方向に戸口を向けて立っている。北西風を避けるには、その方向が適していることは確かである。人びとは戸口の方向を南ないし前とみなし、反対側を北ないし後ろとみなす。天幕を見れば、すぐに方位を確認することができる。

戸口を入ると、中央にストーブがある。火の場所であり、かつては五徳がおかれていた。ここには、家系をまもる火の神が宿る。この神聖な中心点はゴロムトとよばれる。その奥はホイモルとよばれ、仏壇があり、家族の写真なども並べられる。いわば奥の座である。

戸口を入って右手すなわち東側には台所用品が並ぶ。こちらが女性の座である。一方、戸口を入って左手すなわち西側には鞍などの馬具一式が置かれている。こちらが男性の座である。一般の客人ならここへ通される。

奥の座から見れば、南面して、右すなわち西が上位となり、左すなわち東が下位とみなされる。

一〇畳くらいのワンルームといえども、ゲルの内部にはこのように厳格な秩序がたもたれているのである。

同じ原理が、一つの宿営地を構成する天幕群のあいだにも認められる。もっとも西側にある天幕がかならず上位の家である。たとえば、兄弟の間柄なら、家督をつぐ末っ子がたいてい西側に陣取っている。

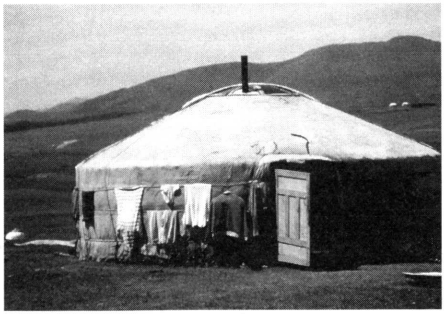
モンゴルでは、成長した男子から順に動産である家畜を分与され、独立してゆき、また女子も婚出する。最後に残る末息子が両親の面倒を見ることが多い。こうした末子相続は、増える家畜を順次分散させてゆくという意味で、生態学的に理にかなった習慣であるといえよう。草にやさしい相続制度を人びとは選択してきたのであっ

た。

一つの宿営地はホト・アイルとよばれる。ホトとはヒツジ群などの休息場所であり、アイルとは家庭を意味する。すなわち、ヒツジたちの寝床と人びとの寝床のセットが、宿営地なのである。ちなみに、このホトという単語は都市をも意味する。**モンゴル国ではしばしば首都ウランバートルをさす。**天幕が集まり、家畜の群れを統合し、ともに宿営し、ヒツジたちの寝床を構成することが、家族を超えた共同体の原点であることが了解されよう。

こうした日常的なホト・アイルという集団のほかに、フレーンとよばれる集団が構成されることもある。

たとえば、中国内蒙古自治区の草原で夏の祭典ナーダムのとき、ゲルが円形に集まって広場がつくられていた。南東方向が広場の出入口になっている。広場に入ると右手すなわち東側に食堂が並ぶ。反対側には洋服店など各種店舗が並ぶ。奥には写真屋が立ち並んでいた。まさに、



ゲルは北西風に背を向けるように立っている。

夏の宿営地。

ゲル内部、奥の座。

ゲルの空間秩序がそのままに拡大して、臨時集落が再現されていたのであった。言い換えれば、天幕に凝縮して現れる空間秩序は、天幕を超えた普遍性をもっているのである。

牧畜作業の必要から生じているホト・アイルは、日常的集団であり、天幕群は円形に配置されることが多い。一方、フレーンはかつて狩猟や軍事などの目的で集合した非日常的集団の隊形であり、まさしく円陣を意味する。チンギス・ハーンの軍隊においてもまた、料理人たちの天幕は東側に、客人たちの控え室は西側に、配置されていたにちがいない。

**◉春の宿営地ハバルジャーにて**

モンゴルの春は厳しい。天候は一年で最も不安定である。突然の大雪にみまわれたり、空が赤く見えるほどの土埃が舞う。越冬用に準備しておいた肉は食べ尽くされ、新鮮な乳製品はまだ豊富にならず、食糧事情も一般に一年で最も悪い。

それでも着実に暖かくなるのが感じられる。そんな頃に、空に鳥たちを発見する。渡り鳥たちもやがて帰還する。天を渡る鳥たちが命をはこんできたかのように、大地に命が満ちてくる。家畜の出産シーズンの始まりである。

家畜の授乳・哺乳を介添(かいぞ)えしたり、子畜の面倒を見ようとしない母畜に歌をうたって母子関係の修復に努めたりと、牧民と家畜との関係はきわめて濃密になる。この時期には、家畜を群れとしてまとめてあつかうことよりも、むしろ個体ごとのケアが重要な意味をもってくる。一年でもっとも多忙な時期である。

春はハバルとよばれ、春の宿営地はハバルジャーとよばれる。このハバルジャーには、たいてい寒気から子畜をまもるために簡単な小屋サラプチが建設されている。森林ステップなら木材をもちい、木材の不足する地域なら石材をもちいる。

ここで半ばこもるように、家畜の対個体関係に没頭する。家畜の出産作業を終え、子畜に対する去勢作業を終えて、夏の宿営地へむかう。

二月中旬ころから五月下旬ころまで、およそ三ヵ月暮らした春の宿営地をあとにする。

**◉夏の宿営地ゾスラン**

夏はゾンとよばれ、夏の宿営地はゾスランとよばれる。

ゾスランは、川のほとりや、丘の上など、一年で最も快適な季節をすごすにふさわしい場所が選ばれる。分散した春の宿営地から多くの天幕群が集まる傾向が見られる。

ゾスランではさっそく剪毛（せんもう）作業を始める。ほっておくと抜け落ちてしまう家畜の毛を、脱落前に刈り取って収穫物とする。羊毛からフェルトをつくる作業もたいていゾスランでおこなわれる。

まず刈った羊毛を手で適宜ほぐし、次に両手に棒をもって交互に打つ。水分をあたえながら羊毛をたたいてはほぐすこの作業には、ホト・アイル共同体を超えて近隣からも応援がかけつける。ほぐした羊毛を敷きつめて、軸棒に巻きつけ、ウマなどに曳かせて押し固めてゆくと不織布ができあがる。

毛を刈る作業はとりたてて儀礼を伴わないが、こうしたフェルト製作作業には儀礼がつきものである。大勢で歌をうたいながら、綿打ちならぬ羊毛打ち作業をおこなうと、祝祭気分ももりあがる。

これほど羊毛がふんだんにあるにもかかわらず、伝統的な織りの技術は開発されてこなかった。羊毛はフェルトにして、それを住居に着せてきたのである。人が着るのは、冬は革衣であり、夏には交換で手にいれた綿布や絹であった。

ゾスランでの牧畜作業は何といっても日々の搾乳（さくにゅう）が中心である。ゴビ（乾燥ステップ）地域ではラクダやヤギの、ハンガイ（森林ステップ）地域ではもっぱらウシの、平原ではヒツジの乳をしぼり、山岳地域ではヤクやヤギの乳をしぼる。

ヒツジやヤギの乳をしぼるには、近隣のホト・アイルとの協力関係がみられる。自分たちの子ヒツジ群と他の子ヒツジ群とを入れ換えておけば、母ヒツジ群と一緒に放牧してもかまわない。日中、子が母の乳を飲む機会が失われて、人のしぼる乳が確保される。こうした乳しぼりをめぐって協力関係のある宿営集団どうしの関係を、サーハルト・アイルという。

しぼった乳からは各種の乳製品が加工され、蓄積される。ウマの乳をしぼれば、馬乳酒もできる。こうした搾乳とそれに続く乳製品加工の作業は、ウマの場合に男性がかかわるのを除いて、もっぱら女性が担当する。勤勉な女性たちは、夜明け前に朝の搾乳をすませ、夏の遅い日没頃に夜の搾乳をおこなう。この間に乳製品づくりに

専念する。女性にとって決して楽とはいえない季節である。

それでも収穫の喜びにあふれている。馬乳酒の祭りや結婚式など、あちらこちらで祝宴がもよおされる。このように夏に顕著になる祝宴や共同作業は、夏に人びとが集まる傾向と整合している。ゾスランはまさに開放的な空間であるといえよう。

おおよそ六月から八月までの約三カ月をゾスランで過ごすことになる。

**◉秋の宿営地ナマルジャーにて**

ゾスランで最初の雪が降ると、秋の宿営地に旅立つ準備が始まる。おおよそ八月下旬ないし九月上旬に移動がおこなわれる。秋はナマルとよばれ、秋の宿営地はナマルジャーとよばれる。

ナマルジャーからほど遠くない所に、たいてい草刈り場が設けられている。かつて撒水用のパイプラインが引かれていたような草地は、今日では維持が難しくなっている。牧業組合ネグデルが解散し、個別経営化したため、管理がゆきとどかないのである。無理な投資を必要としない自然草地の草刈りの方が、継続はたやすい。

ナマルジャーでのもう一つの主要な作業は、ヒツジやヤギの種付けである。それまで種オスに結びつけられていた貞操帯をはずす。ふんどしのような布で、ホグとよばれる。あるいは、よそへ預けていた種オスを引き取って来て群れに合流させる。ウシやウマ、ラクダはもっぱら自然交尾にゆだねる。

秋は家畜にとって、越冬前の、いわば最後のかきいれ時である。草に実った種子をたっぷり食べさせて太らせる。草原の種子植物を最大限に利用するために、オトルとよばれる分派的移動に努めるのも、秋の重要な牧畜作業となる。

男性たちは、簡易テントを持参し、群れを連れてナマルジャーを離れる。点々と移動をくりかえす。短い秋をさらに短く感じさせるリズムで展開する。男性たちにとって、いわば単身赴任の季節となる。

そして、一一月ともなれば、日中の気温も氷点下にとどまる。いよいよ冬の宿営地への移動が始まる。

**◉冬の宿営地オブルジョーにて**

冬はオブルとよばれ、冬の宿営地はオブルジョーとよばれる。

オブルジョーにも、たいてい家畜を収容するための囲いなどの固定的施設が設けられている。とはいえ、いわゆる舎飼いがおこなわれているわけではない。どんなに寒くても草原へ家畜を連れ出して、日帰り放牧をおこなう。

小屋や囲いがおしなべて設けられるようになったのは、社会主義下の政策によるものだが、それ以前から寒い季節の宿営地には、牛糞の山が用意されてきた。移動に先んじてあらかじめ牛糞を集めておくのである。その意味では、固定的施設をともなっていた、といえよう。

季節ごとに用意されている宿営地の、その名称から判断すると、夏の宿営地だけが特殊であることがわかる。固定的な施設をまったく用意する必要がないという夏の空間の開放性をよみとることもできよう。個別的に閉鎖的な宿営地で暮らす三つの季節と、つどいつつ開放的に暮らす一つの季節が対比されるのではないだろうか。

オブルジョーは、北西風を避けるようにして、山かげや窪地に設けられている。そこで、人も家畜も寒さに耐える。やがて冬至になれば、ユスン・ユス（九の九）とよばれる八一日間の厳寒期が始まる。旧正月を迎えるまで、オブルジョーで過ごす。

オブルジョーでの生活は、脂肪のたっぷりついたヒツジ肉を食べることによって成り立っている。それは、厳寒期の薬膳（やくぜん）にも等しい。

まず、秋に太らせた家畜が痩せおとろえる前に、ほふって肉を準備する。越冬食糧を用意するのである。各家庭で、ウシ一頭、ヒツジ数頭をまとめてほふる。倹約家なら、早めに内臓から食べてゆく。

肉は解体して細いひも状にしておき、乾燥させておくと、いつでも干し肉をもちいて温かいスープができる。

この季節なら、つねに氷点下なので肉を塊のままにしておいても腐らない。旧正月になると、ヒツジ肉の塊を解凍し、みじん切りにしてボーズとよばれる肉ぎょうざをつくる。あるいはまた新たにヒツジをほふってたくさんのボーズをつくっておき、冷凍しておく。

旧正月の祝いを飾る儀礼食もまたヒツジ肉である。鏡餅のように、丸ごとゆでたヒツジを生きていたときの姿に似せて盛りつける。旧正月は、肉食の季節のクライマックスといってもよいであろう。しっかりと肉を食べ、脂肪をとって耐え抜いた頃に、再び春がめぐってくる。

# ダムディンギーン・ノロブバンザド
# 音の世で歌うために生まれた私

訳：小長谷有紀

**◉あやうい誕生**

一六番目のラプチュン（干支）の、かのとひつじ（辛未）の年の冬の初めの月の二五日、すなわち一九三一年一二月一〇日は、恩ある母の胎内より出て、主のあるこの世に声をあげ、人として生まれた善き日であった。

その年、雪は多く、雪害の兆しがあったため、わが家は難を避けてオトルへ移動し、セツェンハン盟のボルジギン・セツェン・ワン旗のイフ・エレーニ・スーデルティーン・オラーン・オボー（現在のドンドゴビ県内）という暖かく居心地のよい営地（燃料となる畜糞を貯めて積んであるところ）で冬を過ごすために下営した。まだ天幕を組み立て終わらないうちに、母は産気づき、あわてて天幕内の畜糞の上に私を産み落としたという。母の乳房を吸うこともできず、口から白い泡を出し、泣くこともできない、命あやうい赤く幼い生きものであった。

ともに宿営し、私をとりあげてくれた老婆が家へ入ってきて「フーイ、こりゃ体内に寒さが入って凍え死にしそうだよ。裸のまま肝臓の上に抱いて暖めておやり」と言った。そこで母は私を肝臓のあたりに置いて暖め、乳房から温かい乳を私の口に一滴一滴としたたらせたのだった。

生後三日め、ラマ（僧）をまねいて運勢を尋ねるために、もも肉の付いたシャーント（脛骨）、ダル（肩胛骨）、四つの長い肋骨を煮て、食を供えた。しかし、父は私を不安げに見つめて「命のない生きものが生まれたもんだ。ラマをまねいて食を用意したって無駄だろうさ」と大いに嘆いた。すると、私は生後三日を経て突然、力強い声で泣きはじめたという。悲嘆にくれていた両親は喜んだ。

父はラマをよんで私の誕生日から運勢を占ってもらった。そのラマは赤ん坊に、ノロブバンザドという名を与えて、幸運で、多くの友人に恵まれ、長生きし、歌や楽器や宴を好み、一〇〇人を喜ばせて生きるだろうと祝福

した。膝の星に生まれたので、一カ所にとどまらず、あちらこちらへ大いに行く人だともおっしゃったそうな。両親は大喜びして、バダルチン（托鉢僧）について行ってしまうのだろうかねえと嬉しそうに話したのだった。

**◉家族たち**

当時、わがゴビ地方では子どもの出生が少なかった。私の母は三〇歳が近づいても子に恵まれず、しかたなく兄弟から一人の娘を養子にもらった。私にとって姉となるその養女は、ドンボ（水差し）をゆりかご代わりにして「天幕の裾をあけっぱなしにしているもんだから、この黄色い生きものが寝つけないよ」などと言って赤ちゃんごっこをして遊んでいたそうである。

「子どもというのは偉大な予言者なんだよ。姉さんがそうやってゆりかごで遊んでいたのが、希望どおりに現実となって、まもなくおまえが生まれることになったんだ」と、母は私によく言ったものだ。私のあとに、二人の男の子と一人の女の子が生まれ、わが家は子どもの騒がしい声に満ちた家庭となったのである。一人の弟は小さい頃から学を志し、海外で学び、長年、銀行で経理を担当している。もう一人の弟と妹は、田舎で家畜を放牧して生活している。

ダムディンギーン・ノロブバンザド。

わがゴビでは、人が少なく、家畜が多かった。私の親戚はみな一般の牧民である。母の母は三五歳で亡くなり、母は祖母の手で育てられていた。その祖母、つまり私にとっては曾祖母が、両眼ともに視力を失っていたが、いつも私に子守歌を歌ってくれていた。私は「ボンダン・ツアガーン（ハート形の白）」と名づけられた。曾祖母は、ボンダン・ツアガーンを背中に懐に入れて育てなさい、おまえにはこの娘がやがて役立つだろう、と母に命じたらしい。

わが父ダムディンは見習い僧とでもいうべき人で、寺院の管理所にいてもっぱら本をめくっていた。そのため、家事や牧事はすべて母の背に負わされていた。曾祖母がまもなく亡くなると、私の世話をする人がいなくなった。母はヒツジの乳をしぼったり、ヒツジの母と子を分けたりと、あれやこれやに忙しく、家にじっとしているわけにはいかないので、私をデール（民族服）にくるんで座らせていた。それでもまったく泣くことなく、おとなしく、いつも微笑んでいたので、「ミャル・ボグド（従順な聖）」と名づけられた。私は

デールにくるまれて座ったままで寝てしまうので、母は安心して家事や牧事に専念できたのだった。

**◉ふるさと**

私が幼少期をすごしたふるさとは、一九二四年にボグドハン山盟のデレン・ソムという行政単位となった。今日のドンドゴビ県デレン・ソムである。ドンドゴビの県庁所在地であるマンダルゴビから六八キロメートル、首都ウランバートルからは二一〇キロメートルの地にあり、ソムの領域はツァント山の南麓を中心に三九万ヘクタールをしめる。ここにおよそ四〇〇戸、約一八〇〇人が住み、約七万頭の家畜がいる。小ぶりのソムではあるが、ウマの頭数は県で第三位である。わがソムは古来より駿馬の産地として、また駿馬を育てる名人の多い土地として有名であった。ハンザン氏の淡黄のハリョーン（たてがみや尾の色がきわだって濃い毛色）、ジョライヨンドン氏の耳の短い栗毛の種オス、トボーチ氏の茶色の種オス、ガルマー氏の葦毛などなどの駿馬が、ソムやアイマグのみならずウランバートルで開かれる国のナーダム祭でも幾度も勝った。優れた駿馬の血統と素晴らしい調教師の伝統はいまもこの地に生きている。

わがふるさとは、ゴビ（乾燥ステップ）っぽいところで、小さな丘と平原がつらなり、五畜のはむ滋養あふれる草地が広がっている。人の目をひく巨岩や山など、視力をはかるがごとき広大な景観によって構成されている素晴らしい土地は、いまも私の心をひきつける。

そんなふるさとで物心ついた頃から、私は子ヒツジ・子ヤギを放牧し、牛糞を集めては両親を助けた。家畜の出産期をむかえる春はとりわけあわただしかった。私は、すぐ下の弟と二人で、自分の家の子ヒツジ・子ヤギをつかまえてホグノ（子畜専用の綱）に結びつけ、よその家の子ヒツジ・子ヤギをつかまえては手渡す手伝いをした。母は私たちにいつも、人が疲れているときに手伝っていれば、いずれは自分に恵みがあるものだ、助けは人のためならず、と教えた。

私は、子ヒツジを嫌って面倒をみようとしない母ヒツジに、「トイグ、トイグ」とかけ声を歌って、子とらせ作業をするのが得意だった。素晴らしいメロディには家畜でさえも感動し温厚になるものである。子ヒツジを嫌って、乳を飲もうと下腹部にもぐりこんでくるわが子を蹴りあげていた母ヒツジは、澄んだ声でひびくトイグの歌を聞くうちに、やがて穏やかになり、子ヒツジの匂いを嗅ぎはじめ、子ヒツジをなめて授乳をゆるすようになるのである。

**◉放牧の一日**

ゴビではたいてい、二〜三戸の家が集まって一緒に宿営し、ヒツジの群れを順番に放牧する。私は、当番にあたって放牧するのが好きだった。草原に出て、一人で思いっきり歌うのは素晴らしい。母から教わった歌を喉がかれるまで歌ったものだ。

緑のウマの頭には
おもがいの結び目がゆれている
貴族の国境見張り番の娘グンジドマー
眠くなって目が丸くなっている

夕方にはヒツジの群れを宿営地にもどし、乳をしぼってから残り乳を子ヒツジに飲ませる。黄昏時になると子ヒツジを群れから分け、サーハルト（日中の放牧時および夜間に乳を飲んでしまわないように子ヒツジを交換するという協力態勢をとっていること）の家に、子ヒツジを追ってゆく。サーハルトの家からもまた、わが家へと子ヒツジを追ってくる。サーハルトの家で子ヒツジの分離がまだ終わっていないようなら、「子ヒツジを分けた？」と平原一杯に大声をはりあげ、その家に駆けつけたものだった。

サーハルトの家の子どもたちと一緒に子ヒツジを交換し終えると、戸外で熱心に遊び、いろいろなおしゃべりをし、流れ星に興味をもって、あなたの星だの私の星だのと笑って楽しくすごした。あの頃、近隣の子どもたちと遊び戯れ、歌を歌い、ときにはけんかをして過ごした幼少期が、二度とふたたび訪れないと思うと、どうしようもなく悲しくもある。

弟と二人で放牧するときもあった。ヒツジの群れを移動させて放牧地に落ちつかせると、私たち二人は石ころでままごとをした。遊びに夢中でヒツジのことをすっかり忘れたりした。ふと見ると、ヒツジたちはどこへ行ったものやらあたりにいない。わがふるさとには野生の白カモシカがたくさん生息しており、時にはヒツジの群れと合流してしまう。ヒツジがカモシカについていってしまうこともある。私の弟は駆け足が得意なので、弟にヒツジを追ってくるよう命じて、シルブール（家畜を追うためのひものついた棒）をウマがわりにして走らせた。しばらくすると、丘の向こうからヒツジを追って弟は出てきたのだった。

**◉宴と歌**

わがふるさとの人びとは昔からすばらしい馬乳酒をかもしてきた。デレン地方の馬乳酒として有名であり、本当に馬乳酒づくりのノウハウに長けた人びとがいる。七月末から八月上旬になると、馬群をもっている家ならど

こでも、子ウマをつかまえてゼル（地面にはわせた綱）に結わえ、母ウマの乳をしぼりはじめる。各家庭に二〜三個のホフール（革袋）に馬乳を満たし、それが飲んでも飲んでもなくならないくらいになると、大小さまざまな宴があちらこちらで催された。

わがふるさとの宴は、チンギス・ハーンを生んだボルジギン一族のしきたりをまもっている。ボルジギンの宴には実に詳細なきまりがある。すべての宴は「万の母」という歌に始まり、「平安の喜び」という歌でお開きにする。若者たちは二手に分かれて、指を出し合ってデンベー（負けると酒を飲み干す指じゃんけん）をして、馬乳酒を飲みあっては遊びほうける。ゴビの人びとは、遠近各地から人が来て馬乳酒を飲んでいれば幸せに思う。いまでも客人が来ると、泊まってすごしてゆけ、一つ楽しく騒ごうと誘うのである。

私の父ダムディンは、私をウマに相乗りさせて、よその家の宴によく連れていってくれたものだった。宴に集った人びとが太い声でオルティン・ドー（音を長くひきのばす民謡）を歌い、皆で唱和するのを、私は心ときめかせ、耳をすまして聞いた。彼らのように上手に歌えるようになりたいと思い、民謡の素晴らしい調べに小さな心をときめかせたものである。そもそも私の母ナムジルが歌や宴を好み、リンベ（笛）を上手に吹き、ことば遣いに巧みで、お話をたくさん知っていた。

小さい頃から歌うのがとても好きだった私は、ときには寝床に入っても歌っていた。父は「人はどんなに幸せでも寝床で歌うものじゃない。どんなに苦しくても寝床で泣くものじゃない。わが娘ときたらしょっちゅう寝床で歌っている。不幸せになったらどうする……」と心配していた。

### ◉タブハイさん

出生時に私をとりあげてくれた老婆の息子タブハイさんは、家畜をたくさんもっており、ウマを調教する名人でもあった。私は、その家のウマに乗り、競走に出たものだ。地方選抜の競馬が開かれるたびにウマにギーンゴーを歌って気合いを入れた。あの当時の、競馬開始前におこなわれるギーンゴーのさまはそれはそれは素晴らしい響きだった。私の歌うギーンゴーは、二戸のサーハルトの間を遠く響きわたるほどの声だったと語り草になっている。

私が六〜七歳だった頃、タブハイさんの家に町で買ったレコードプレイヤーがおめみえして近隣の話題になった。以来、私はこの家にしょっちゅう出入りするようになる。籠いっぱいの牛糞を集めて来るものだから、家人

はいたしかたなくレコードをかけて聞かせてくれる。そうして、私はここでたくさんの歌を覚えることができた。それが、将来私の生活のかてになるとは、当時は思いもよらなかったことである。

タブハイさん自身が故郷で有名な歌い手であり、音楽の虫のような人だった。オルティン・ドー民謡もとても大きな声で歌ってくれる。タギーン・ハド（蓋の岩）とよばれる大きな奇岩があり、放牧に出たときそこで声をはりあげると、こだまが遠くまで反響したものだった。

蓋の岩のこだまといったらなんとまあ
タブハイの声といったらなんとまあ

岩のこだまのように大声を出せるタブハイさんのことを、こんなふうに私たちは歌ったものだった。タブハイさんの歌う「セルーン・サイハン・ハンガイ（涼しく素晴らしい森林ステップ、ハンガイの地）」という歌こそは、私がはじめて学んで歌った歌といえるだろう。

**◉学校**

一九四〇年の秋、学校へあがるようにとの通知があった。当時、牧民たちは子どもたちを就学させることを嫌っており、政府はほとんど強制的に就学させていた。学校へ行かなければ罪に問われるとおどかされていた。一般に、家畜が少なく、子どもが多いという家庭の子らが学校へ通った時代であった。父母の懐から出たことのない私が、デルゲルツォクト・ソムの中心地にある学校へ行くこととなった。

「こんな幼い生きものをそんな遠くの地へ行かせるだなんて」と、近隣の人びとは目に涙をためて見送った。両親は私を校内の寮まで送りとどけたものの、二〜三日は泊まって、いよいよ帰るというときには涙を流して、なかなか出立できないでいたのだった。

寮生活が始まると、私は寂しくて学業に身が入らない。成績は決してよくなかったが、音楽だけはいつも優であった。学校では、たくさんの歌を覚えることができた。友だちは、髪の毛が茶色っぽかった私を「ドーチン・シャル（黄色い歌い手）」とよび、背が低く年も小さかった私を椅子の上に立たせて、歌わせた。

学校のある町の商店の店員だったジャンバさんは、私が店に入るといつも歌わせてはお菓子をくれた。ときには、大勢の子どもたちと一緒に店へやってきて、歌っては褒美にもらったお菓子をみんなで分けて食べた。

しばらくの間、母は私のことを心配してたびたび学校までやってきた。二年めからは、両親が学校のそばに住

むようになり、ホームシックにならないようになった。三年生を終えようという頃、父が亡くなり、母は家庭の事情をソムの官吏に訴えて私を学校から出した。

それからはふたたび放牧し、牛糞を集め、さらに乳をしぼって乳製品をつくり、家畜に水をやり、井戸で水を汲み、牧民の子としてさまざまな作業にあたって母を助けたのだった。私は、家事はさほど好きではなかったが、放牧の仕事だけは好んでした。なぜなら、広大な平原へウマに乗って駆け出すのは、素晴らしく心地よかったからである。

義務教育は三年でやめてしまったけれども、生涯人前で歌って生きるという私の道は、早くも一九四〇年代初頭に、学校の教室から始まったのであった。

【解説】

ノロブバンザドは、モンゴルを代表する女性歌手である。一九五七年、ウランバートルでおこなわれた全国音楽祭で選抜され、モスクワで開かれた世界青年音楽祭に出演し、「セルーン・サイハン・ハンガイ」というモンゴル民謡を披露して金メダルを獲得した。以来、東欧などもっぱら社会主義諸国で活躍していたが、〔一九八七年〕には日本の国際交流基金の招きによって初めて来日。アジア五ヵ国の演奏家たちによる公演で好評を博し、その後、十数度にわたる来日公演をはたしだ。一九九三年には、福岡アジア賞の芸術部門大賞を受賞した。

彼女の生い立ちは、夫である有名な作家バンズラクチとの共同作業によって手記としてまとめられた。本稿は、その手記の前半部分におさめられた、約四分の一に相当する幼少期の追想にしぼってまとめなおしたものである。草原で繰り広げられてきた「音の風景」が伝われば幸いである。時代はめぐり、社会はうつろうにしても、それはいまも、第二、第三のノロブバンザドたちを育んでいることだろう。

（小長谷有紀）

◉食文化

# 白と赤がささえる草原の食卓

石井智美

## ◉食文化の交流

モンゴルの食文化は、遊牧による家畜からもたらされる乳、肉の恵みを抜きにして語ることはできない。ウランバートルなど都市に住む人びとと、草原で遊牧をする人びとでは、近年の市場経済の影響から、食事の内容に違いが生じてきている。ここでは草原の食事について語ることにしよう。

モンゴルは、かつて騎馬で疾駆(しっく)して世界を席巻(せっけん)し、異文化に接触した。このことにより、乳加工の体系が複雑化し、乳から蒸留酒を造る技術もとりいれられた。決して閉鎖的な食文化ではないのである。

たとえば、お茶は中国から八世紀頃に入った。以来、乾燥するこの地域の水分補給の方法として欠かせない存在になっている。そのほか小麦粉も入っている。現在、麺も小麦粉も、共にモンゴル語でゴリルと同じ単語で呼ばれていることからみて、小麦粉を利用するようになった歴史はまだ新しいといえよう。

中国の食の影響を、食材、調理法、調味料などさまざまな形で強く受けた国は、日本を含めて数多い。しかし、モンゴルはその北にありながら、世界に冠たる中国の食の影響を、お茶と小麦粉のほかはほとんど受けていない。中国も隣人の食である乳を、基本的にはとりいれていない。万里の長城を境にして、乳利用の有無が明確に分かれる。この断絶は、味覚の保守性だけでは説明のつかない問題である。

漢人により草原の耕地化が進められたとき、遊牧民の生活領域と重なって、無数の衝突が起きた。中国の歴史では、塞外の民は悪役であるが、草原は遊牧生活の基盤なのだ。漢人農民が精魂こめる農耕は、遊牧民にとって生活環境の破壊だった。耕地化された土地は本来保水力

がなく、痩せて再び草原には戻らずに荒廃化した所も多い。漢人とモンゴル人は、草原をめぐる不俱戴天の関係だといえよう。このように本質的に漢人と深く対峙するがゆえに、モンゴルの食は、家畜を中心とした食文化を守ってきたのではないだろうか。

最近、モンゴルでも畑作がおこなわれるようになった。野菜もウランバートルの市場では売られている。野菜を食べないとは、もはやいえない。これは中国の影響というより、時代を背景にした変容である。

**◉草原の食事**

モンゴルの主食は、遊牧の家畜からもたらされる。夏は「白い食べもの」の乳製品、冬は「赤い食べもの」の肉という二つである。これらは、明確な季節性を示している。

白いフェルトで覆われたゲルの中では、夏も中央にストーブが据えられている。ここで乳茶を作ることから一日が始まる。煉瓦状のタン茶を削り、それを煮出した中へ乳を入れ、塩を少々加えてつくる。塩を入れるのは意外な気がするが、これは塩分補給の民族の知恵である。ただし、モンゴル国の東部では塩を加えない。それは、もともと塩分やソーダ分を含んだ水を利用しているからだといわれる。

朝と昼は、ホロート（チーズ）と乳茶に、炒ったキビなどの穀類、ウルム（乳脂肪を集めたクリーム）を加えたものを何杯も飲んで済ませる。立ったまま素早く終わらせることもある。決まった時間に食事をとる習慣はない。ホロートはつくりたて以外は硬くなる。食べるというよりしゃぶるのに近く、また乳茶に浸して柔らかくして食べたりする。懐に入れると、そのまま携帯食になる。腐敗する心配など無用だ。乳製品は食事でありおやつでもある。ホロートは、口に入れると乳の匂いと独特の味が広がる。歯が丈夫でないと、モンゴルで生活するのは大変かもしれない。

ホスピタリティあふれるモンゴルでは、来客に熱い乳茶と山盛りの自家製乳製品が供される。見ず知らずの旅人だろうが、外国人だろうが同様に歓待される。

夏の夕食は、搾乳後に家族揃ってとる。少量のヒツジの肉を入れて塩で調味した汁に自家製の麺を加えたヒツジ肉うどんなどを、フォークを使って食べる。気温が下がる夜、熱いスープの食事は、身も心も温まるご馳走と

いえる。これが、普段着の草原の食である。

自給自足の草原で日常摂取される食品の種類は多くはない。日本の厚生省の食事指針が示す「一日に三〇品目の食品をとりましょう」という発想の対極に位置する食が、ここモンゴルで実践されている。

**◉肉の利用**

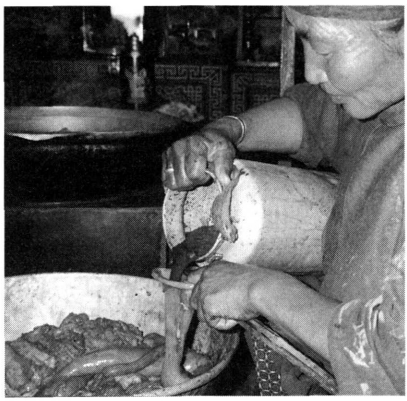
漢人にとって肉といえばまずブタ肉であるが、モンゴル族にとって肉とはヒツジ肉だ。

一頭あたり三〇～四〇キロのヒツジは、乳、肉、毛皮等を提供する。これだけ遊牧民の生活にとって価値のある物資を提供できるのは、ヒツジ以外にないといわれている。生活の基盤が全て遊牧の家畜の上に成り立っている。大げさにいうと「生きた食糧庫」をモンゴル人は持っている。配合飼料ではない、天然の草を食べてまるまると太り、新鮮で、食品添加物などとは無縁の食材である。

ヒツジをゆでた料理ブヘリ・マハは、草原の最大のもてなしである。日本などでは、肉はほふった後、必ず熟

ヤギの料理（ボードク）を囲んだ夕食のひととき。

ヒツジの解体。



ヒツジの腸に血を詰めて、ソーセージにする。

成してから食べるのがおいしいとされているが、モンゴルでは、ほふってすぐに食べることも多い。人類の肉食の古い形がそのままおこなわれているといってもよかろう。肉はそのままでも臭みなど全くなく、日本で提供されているマトンと同じ種類の肉とは思えない。モンゴル人は「モンゴルの草で育ったヒツジが世界一」と胸を張る。冷凍、解凍を何度繰り返したか分からない、普段食べている肉が色褪せて感じられる。

「ヒツジをほふる時、草原に一滴も血を流してはいけない」といわれている。これは、チンギス・ハーンのお触れ書きとして記されている草原の掟だ。体内に溜まった血は、腸に詰め、ソーセージとして、他の内臓とともにゆで、ヒツジに敬意を示すために最初に食べる。内臓からミネラル分を享受する効果と、家畜を完全利用する知恵が込められているのであろう。

肉を食べる時は、たいていみんなが集まる。笑顔だ。内臓も肉も手掴みである。男はナイフを使って、口に肉を放り込む。ヨーロッパ流のテーブルマナーなど、ここでは通じない。草原に座り、骨つき肉に齧りついていると、全身でモンゴルを感じる。おいしい、幸せなひとときだ。真っ先に脂肪のついた部分に手が伸びる。脂肪は甘く最も好まれる味覚である。ゆで汁は溶け出た栄養素を利用するために、スープとして飲まれる。こうして肉のすべてから、エネルギー源を確保する。

ヒツジをほふった際の毛皮は衣類に加工され、第一胃は乳製品の保存容器になる。唯一利用されないのは、胆嚢だけという徹底ぶりだ。

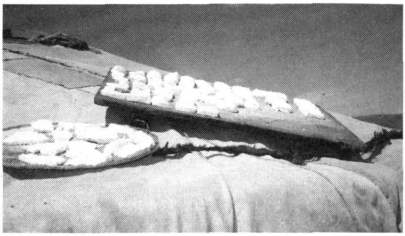
日本のいわゆるジンギスカンと呼ばれている焼肉料理は、過去も現在もモンゴルでは一般に見うけられない。モンゴルの人びとは、この料理名にとても驚く。モンゴルの英雄の名前を勝手に使っていることに、こちらは申し訳ない気持ちになってしまう。

そのほか、野趣溢れた料理として、ヤギのボードクがある。ヤギの体そのものを容器に見立て、一度抜き取った内臓、骨、肉などを焼いた石とともに体内に戻し、外から火で焙るというものだ。鍋のなかった頃の古い料理形態をしのばせる。草原の珍味といわれる齧歯類のタルバガンもボードクにすることができる。

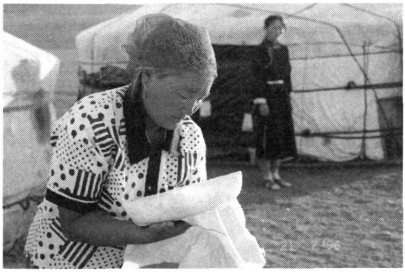
冬に向けて一一月頃には、家畜をほふり、冬から春までの保存食とする。外は天然冷凍庫だから腐敗の心配は

ない。だから冬は肉が中心となり、肉の残りの少なくなる春が、一年で一番質素な食生活になる。

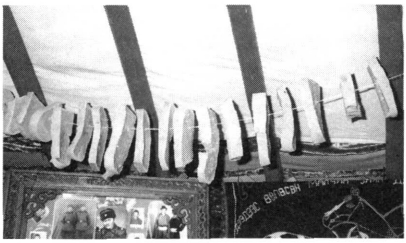
モンゴルでは、ほとんどの男性がヒツジをほふることができる。子どもの頃から見よう見まねで手伝いながら覚えてゆく。見事なナイフさばきで、約二〇分ほどかけて各部位に分けてしまう。このほふるという行為が、家畜の生命を、人が生きるための糧として得、生命を受け継ぐという厳粛な行為であることを、モンゴルの肉の文化は示している。食べ物の姿が見える食なのである。



ゲルの上に並べて、乾燥させている各種のチーズ。



ホロートができた。



ゲルの中につるされたホロート。

**◉乳製品の数々**

搾乳は、家畜をそこなわずに食を確保できる方法である。モンゴルでは搾乳した乳は、母乳の足りない幼児のほかは、そのままで飲むことはない。全て保存を考えて、何らかの形に加工される。

草原の夏は、女性が乳製品づくりに忙しい季節であり、食卓が新鮮な乳製品で満たされる季節でもある。モンゴルでは、加工に用いる乳の種類、製法によって三〇種類近くの乳製品があるといわれている。

たとえば、前に述べたホロートは、冬の保存食の筆頭である。家族の好みに合わせて数種類のホロートが、一〇〇キログラム単位で貯えられる。

日本などでは、乳製品は工場で個別の製品としてつくられる。それに対してモンゴルでは、ゲルがクリームからチーズまでの乳製品を連続的につくる草原の総合乳製品工場となっている。その加工には、ストーブ、保存容器、鍋といくつかのささやかな道具が使われるにすぎない。

発酵を起こすのに、日本などのように、特定の菌を発酵素（スターター）として添加する方法はない。乳や乳の保存容器に棲み着いた有用な菌の働きによって起きる。ゲルでは、実に大らかに乳製品がつくられているにもかかわらず、均質な乳製品ができる。

発酵作用は、乳中の乳糖を消化できるグルコースとガラクトースに分解して下痢を防ぎ、カルシウムやたんぱく質を望ましいかたちで吸収させる働きを持つ。

乳の保存容器は、蓋つきで攪拌棒（かくはん）がある円筒状のバターチャーンに似たモドンガンが多く使われている。その中へ乳加工の中途産物を入れて、発酵させたものがオンダーである。モンゴルの乳加工では、このオンダーが乳製品にバラエティをもたらし、発酵状態や製造時間を調整するユニークな存在となっている。これら保存容器は殺菌されることもなければ、洗われることもあまりない。従ってゲルごとに特有の菌叢が形成されているのである。

保存容器の中で発酵が進んだ乳が加熱されると、ホロートがつくられるほか、このオンダーを蒸留器にかけることによって蒸留酒アルヒもつくられる。酒屋のない草原では、乳からお酒まで調達されており、ゲルが酒造り工場にも変身する。

モンゴルの乳加工の特徴の一つとして「最初に脂肪分を取り出す」ことがあげられる。エネルギー源の脂肪を確保することになる。

脂肪を集めた代表的な乳製品がウルムである。搾乳した乳を、大きな鉄鍋で温め、弱火にして杓で乳を高い位置まですくいあげる動作を繰り返すと、鍋の表面に乳脂肪分が浮き上がってくる。ひと晩静置してできあがる。そのまま食べたり貯蔵して発酵後加熱し、シャルトス（バターオイル）をつくる。ウルムは甘く、上質の乳製品である。トルコの伝統的乳製品カイマクと同じ方法でつ

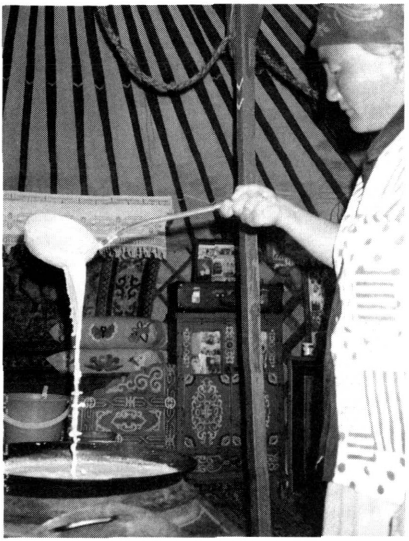
くられている点が興味深い。

ウルムを取った残りの脱脂乳ボルスンスーを加熱し、前述のオンダーをスターターとして加えるとタラグとよばれるヨーグルトになる。そのほか、ボルスンスーを加熱し、タラグまたはオンダーを加えて攪拌し続けると、白い凝固物が現れる。これを綿の袋に入れて水分を除いたものがビヤスラクである。四角い木型に入れて、水分を除いたものがスーンホロートで、蒸留酒アルヒの残りからは、かなり酸っぱいアルチンホロートができる。このようにさまざまなモンゴルのチーズがつくられる。鍋の中に残ったシャルオス（ホエー）は冷却後ふたたび前述の保存容器などに入れられ、次の加工品の材料となる。

こうしてモンゴル族は遊牧の家畜から乳と肉を得、脂肪分をとるという、炭水化物に頼らないエネルギー源確保の道を編み出し、各種栄養素を摂る工夫をした。感嘆するほど無駄のない食体系を構成している。

**◉モンゴル族の宝もの——馬乳酒**

ウマが食に関与するのは、もっぱら馬乳から馬乳酒を



ウルムをつくる。鉄鍋で温めた乳をすくい上げる動作を繰り返す。

乳製品をつくるさいに、天に乳をささげる。

馬乳酒をかもす革袋ホフール。

製造する時である。これは、アイラグと呼ばれるが、ロシア語でクミスといわれているものと同じである。モンゴル族にとって、特別な飲み物として大事にされてきた。初期の結核に効くといわれるほか、冬の間の肉食で疲れた胃腸をきれいにする働きがあるとされ、馬乳酒のある夏の間、老若男女を問わずひたすら飲む。一切食事をとらずに馬乳酒だけで過ごす人もいるほどである。

馬乳酒は古くはヘロドトスの『歴史』に記載されているが、その実態は、地域特性や民族特性が高く、その名前ほどには知られてはいない。

馬乳酒は、乳酸菌と酵母の働きでつくられる。そのアルコール度数は一～二％で、ビタミンCの含有量が多く、かなり酸っぱいドブロク状の酒である。製造方法は一日五～六回の搾乳後、馬乳を静置し、冷却後ホフールという牛の革袋または瓶などに、あらかじめある程度発酵のすすんだ馬乳酒一に対して新しい馬乳を三程度加え、ブルールという棒で攪拌してつくられる。夏の夜には、眠りに就く前のゲルから、馬乳酒を攪拌する独特な音が聞こえてくる。

自慢の馬乳酒は、専用の椀になみなみと注がれて来客にも供される。その椀は主人によって常に満たされ、何度もすすめられる。ホフールは、一枚の成牛の革を袋状に手縫いした女性の労作であったが、近年中国製の大型ポリバケツが輸入され、普及しはじめている。

馬乳酒シーズン最初の馬乳酒製造には、発酵を起こすスターターが必要とされる。そのためシーズン最後の馬乳酒を少しだけホフールに残し、翌年新しい馬乳を加える方法が古くからおこなわれてきた。そのほかヒツジやヤギやウシの発酵乳を用いる方法やハルハイという野草を用いる方法などがある。

馬乳酒を多量に飲むことで、多量の乳酸菌、酵母などの菌体が腸内に入る。近年の研究から、それらの菌はたとえ死んだ状態でも腸内細菌叢を改善し、健康促進作用があることが明らかになっている。馬乳酒の微生物についてまだ知られていることは少ない。今後の研究が期待される民族飲料である。

コラム

# 子どもの数

前川 愛

合計特殊出生率とは、女性一人が生涯に産むであろう子どもの数である。モンゴルは一九九三年に三・五人で、表のアジア一五ヵ国中七番目に位置している。世界平均は三・一人なので、少し高い程度である。

モンゴルでは社会主義時代、労働力不足解消のため出産奨励策をとり、医療保健施設を整備していった。一九九一年ユニセフとモンゴル保健省によっておこなわれた調査では、清朝支配下時代、女性の一〇％は出産で死亡し、第二子は一歳まで育たなかったと推定している。兄弟姉妹が多く、家族規模が大きくなってきたのは最近であろう。

しかし、一九八〇年代から出生率の低下が顕著に現れはじめ、民主化以降その傾向が強まっている。合計特殊出産率が二・一人未満だと人口が減少していくとされている。モンゴルのように、乳児死亡率（一歳未満の乳児一〇〇〇人に対する死亡率）や幼児の死亡率が高いところでは、二・一以上の値が必要になる。

モンゴルでも女子の就学期間の長期化や人口の都市流入は出生率低下の原因になりうる。一方、家畜の私有化で子どもが働き手となり、牧民の間では子どもの数は減りにくいかもしれない。子どもの数は女性の地位や社会・経済の変化を反映しているのである。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 日本 | 1.5 | インド | 3.7 |
| シンガポール | 1.7 | フィリピン | 3.9 |
| 韓国 | 1.7 | ミャンマー | 4.1 |
| 中国 | 2.0 | バングラデシュ | 4.3 |
| タイ | 2.1 | ネパール | 5.3 |
| インドネシア | 2.8 | ブータン | 5.9 |
| **モンゴル** | **3.5** | ラオス | 6.6 |
| マレーシア | 3.5 | | |

合計特殊出生率（単位：人）
『世界国勢図会 96－97』より

◉年中行事

# 豊饒の季節と忍耐の季節

上村　明

**◉牧民と時の流れ**

新しい牧地に移動してゲルを立てる。子ウシをつなぐロープを張り、ウマをつなぐ杭をゲルのかたわらに打つ。乾燥した牛糞を集めてゲルの前に積みあげる。人間を受け入れそうにない表情をしていた草原が、ゲルを中心にしだいに懐かしい空間へと変わってゆく。

ゲルはシェルターというより浸透膜だ。人間はフェルトの膜をとおして、ゲルの中にいても外の風の動きや家畜の動き、自然の微妙な変化をいつも感じつづけることができる。

モンゴルの牧民の生活は自然との絶え間ない駆け引きの連続といえる。とくに一年というサイクルの中で、自然と家畜の生理の変化をいつも見通しておかないといけない。

モンゴルの年中行事はそんな牧民の自然感覚とどのように結びついているのだろうか。

**◉正月――白い月**

ゲルの外に出せば何でもすぐに凍りついてしまう冷気の中、晴れ着を着た家族連れが何組もあわただしく行き来する。手には贈り物のいっぱいつまった袋や、ボーブという揚げ菓子を洗面器のような容れ物に積みあげて包んだ風呂敷を持っている。正月のためとっておいた、乳から作る酒を入れたポリタンクやビンを抱えているものもいる。子どもたちは、はずんだ心を隠せない足取りで、走り回ったりしている。

モンゴルのソムの中心などで見られる正月の風景である。一年の始まりは、旧暦（チベット暦）で祝われる。

正月はモンゴル語で「ツァガーン・サル（白い月）」という。「白」は「黒」に対して、清浄や善、豊饒を象徴する。乳製品を「ツァガーン・イデー（白い食べ物）」と

いうことから、むかしは乳製品の豊富になる夏が「ツァガーン・サル」だったという説もある。

しかしモンゴルの牧民にとって現在の「ツァガーン・サル」は、彼らの感覚にすっかりなじんでしまっている。この時期は、家畜の子が生まれはじめるので、一年のサイクルの始まりを感じさせるのだ。それに旧暦の正月は寒さもいくぶんか和らいでいる。

冬の間一日一回、ホスラン（その年妊娠しなかった母ウシ）をしぼり、お茶に入れる乳をやっと確保していたのが、ヒツジやヤギの子が生まれはじめて乳がしぼれるようになると、乳なしのお茶を飲むこともなくなる。「ツァガーン・サル」はやっぱり「ツァガーン・サル」なのだ。

正月の準備は、その二〜三日前に揚げ菓子やボーズ（肉ぎょうざ）を作ることから始まる。大晦日の晩は、揚げ菓子を容器に積み上げて飾りつけたり、その上にのせる大きな脂肪尾のついたヒツジの肉を煮るなど大忙しである。一年最後の晩は、ボーズを腹いっぱいに食べるのが決まりだ。そしてテレビの見られるところでは、年末大相撲に興じて一年が終わる。

仏教の言い伝えでは、正月は一年の間仏敵を退治して回ったバルダン・サモ（チベット語で"dpal-ldan-lha-mo"）という女性の護法神（仏法の守り神）が、年末に凱旋して帰ってきた祝いだという。そして人間や家畜が、また一つ年を授かることを感謝する祝いでもある。

**◉年始の挨拶**

元旦の朝、夜明けとともに起き、まず正月の飾りつけを済ませ、家族の間での新年の挨拶が始まる。

一番目上の者（年寄りが同居していたらその年寄り、いなかったら家長）が上座にすわり、目下の者の「アマルハン・サイノー（ご機嫌いかがですか）?」と言って差し出された両腕の上腕部をつかむようにして、「メンドー（元気かい）」と答え、両頬にキスをする。

こうして自分より目上の者すべてに挨拶を終えたものは、挨拶される側となって席につき目下の挨拶をうける。

目上目下の区別は厳しい。年齢よりも続柄による世代の違いが優先する。叔父の妻ならたとえ年は下であっても、目上になる。夫婦は同格だからだ。

それから男同士は「新年をつつがなく迎えておられますか」という挨拶の言葉といっしょに、嗅ぎ煙草入れの

交換をする。嗅ぎ煙草入れは、その場にいる全員に渡される。

客がやってくると、同じように挨拶と嗅ぎ煙草入れの交換がおこなわれる。客たちにはお茶がふるまわれ、アルヒ（酒）も出される。やってきた家族も答礼として持ってきたアルヒを出してふるまう。客が持参した酒瓶は、帰る時、迎えた家でいっぱいに補充するのがしきたりだ。お茶と酒の次は、ボーズがふるまわれる。

ボーズが蒸しあがるまでのあいだみんなでフズル（トランプ・ゲーム）やダーロー（ドミノの一種）に興じる。フズルは団体戦と個人戦がある、ブリッジに似た独特のゲームだ。フズルやダーローといったゲームは、子どものものではない。むしろ大人が真剣に熱くなって楽しむ社交の手段といった方がいい。

蒸しあがったボーズをみんなで食べ、お茶を飲み、ころあいを見はからって贈り物の交換をする。デール（民族服）用の布地とか、男性には煙草などが贈られることが多い。

そして客は持参のボーブを積みあげた容器をまた風呂敷に包み、酒瓶を抱え、次の訪問先に向かう。

目上の家は自分から目下の家を先に訪問してはいけない。こうして数日間は目上の家に新年の挨拶回りをしたり、やってきた客をもてなしたりして過ごす。

**◉春――家畜の誕生**

正月が終わると、本格的な家畜の出産シーズンが始まる。ケースによって異なるが、正月の間いた冬営地から春営地へと移る。牧畜の作業の最も忙しい時期だ。

春は草がまばらで家畜の移動が速く、管理できるヒツジ・ヤギの群れの大きさが制限されてくる。それにヒツジ・ヤギの子は人間の都合にかまわず生まれるから、夜中に何度も見回りに出なくてはいけない。昼間でも、ヒツジ番のあいまにどこかの家に寄ってお茶でもゆっくりと、というわけにはいかない。生まれた子畜を牧地にほうっておけば凍え死んでしまうからだ。そのため、春にヒツジ・ヤギの番に出る者は、生まれたての子畜を入れる袋を背中に背負って出かける。子畜が生まれると、鼻面や脚をぬぐい、母畜が子畜の臭いをかぐのをまってから、布に巻いて袋に入れ、ヒツジ・ヤギの群れを集めゲルの方向に向けてから、急いでゲルに戻る。

生まれた後も大変な作業が待っている。母畜が子畜に

きちんと授乳するように、授乳をいやがる母畜をつかまえておくこともその一つだ。子畜が小さく気候も寒い間は、子畜をゲルの中や囲いの中に入れておくので、朝夕人間が一頭一頭母と子を引き合わせなければならない。

いつもは群れとして管理されるヒツジ・ヤギが、この時期だけは個体レベルでの細かな管理を必要とする。ヒツジ・ヤギの群れを統合し、こういった細かくてデリケートな家畜管理の作業を共同でおこなうためのパートナーにも、より親密な関係を結べる家族を選ぶ傾向がある。

嫌がる母ヒツジの乳を子ヒツジに飲ませる。牧民のもっとも忙しい季節。

**◉夏——恵みの雨**

三月四月と時を経るにしたがって、ヒツジ・ヤギの子は育ち、気候もしだいに暖かくなり、作業の負担も軽くなる。ヒツジ・ヤギほど手のかからないラクダやウシも生まれる。

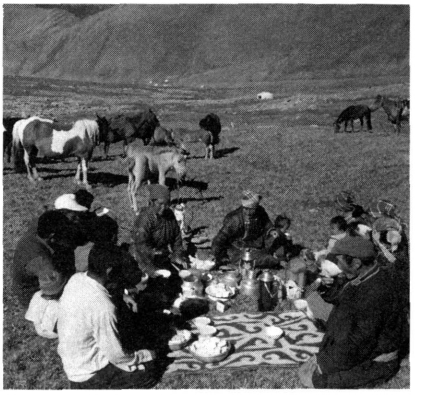
そして五月になると草原には緑が芽吹きさまざまな花が咲きはじめる。牧民たちの夏への期待と不安が交錯する。不安というのは、雨が降らないと家畜たちを養う草が育たないからだ。

その夏最初の雨が降った時は、みんなゲルの外に出て祝い、乳製品を天に向かって撒きながらゲルを右回りに回る。恵みの夏がやってきたのだ。

ウマの子が生まれるこのころ、渡り鳥もやってくる。渡り鳥は福を持ってくると考えられているので、その福にあやかって家畜たちがつつがなく育つようにと祈る。

**◉馬乳酒祭り**

夏営地に移ると、ウマを数多く持ち、女手も十分ある家では、子ウマを捕らえてつなぐ綱を張り、馬乳のしぼりはじめのお祝いをする。ウマの乳をしぼり、馬乳酒をつくることは、豊かな家のステータスシンボルのような


初めてウマの乳をしぼる日。子ウマをロープにつないでから祝いをする。

ものだ。

まず杭を打ち、子ウマをつなぐロープを張る。集めてきた馬群の中から子ウマを捕らえ、ロープにつなぐ。それが終わると、ロープを張った杭のかたわらに近所の人たちも集まり、乳製品を宙に向かって撒き、杭と子ウマを乳脂で聖別し宴に移る。馬乳酒をしぼらない地方も多いし、その祝い方も地方によってさまざまである。

こうして夏から秋にかけての自然の恵みの最も多い季節の到来を祝うとともに、恵みの雨が降るようにと祈る。

**◉オボー祭り**

やはり夏の初めにおこなわれるのが、オボー祭りである。

オボーとは、モンゴルの地方を旅する人だったら、かならず見つかる土地の神が宿るとされる石積みだ。ただし、オボーには「祭るオボー」と「祭らないオボー」の二つがある。旅行者が見つけるオボーのほとんどは、土地の境界や峠にある「祭らないオボー」である。

「祭るオボー」のほうは人の近づかない山の上にあることが多いし、「ドクシン（荒ぶる）」などと言われて、よそ者が近づくのをタブーとしているところもある。それだけ功徳（くどく）も大きく、不思議なことに、祭れば必ずといっていいほど雨が降る。逆にオボーを汚したりすると、干害や雪害などの災害が起こる。

オボーを祭る日は、暦によって決められている。五月か六月（チベット暦の夏の初めの月）ごろの、雨の一番降ってもらいたい時期だ。夏の初めに雨が降ることが肝心で、秋近くになって降っても草の質が悪くなるのでありがたみはずっと薄れる。

オボーを祭る日、土地の人間はオボーの前に集まる。

いっぱんに、よその土地から嫁いできた女性たちは、オボー祭りに参加してはならないとされる。

オボーは祭りの前に、崩れている石積みを直し、上に枝葉のついた柳などの枝をさし、それにハダグ（儀礼用の絹布）などを結びつけるといった飾りつけをすませる。そして四方に、香を焚く小さな石積みを三つずつ作る。人びとは、煮たヒツジの肉、アルヒ、馬乳酒、乳製品を持ちよって、オボーのある山の上にのぼってくる。オボーのかたわらでは火を焚き、持ってきたヒツジの頭や肋骨などを焼いて供える。煮た肉、乳製品、アルヒを焼かずにそのまま供えることもある。

ラマたちはチベット語の経を読んで土地の神である山の主をオボーに招き下ろし、称え恵みを乞う。それから、オボーに供えた酒や食べ物をみんなで飲み食いした後、山を下りてナーダムを開く。

ナーダムは、相撲、弓射、競馬の三種の競技がおこなわれる男の祭典である。今の中国内蒙古では、弓射がおこなわれない地方も多い。

弓射がおこなわれなくなったのは、清朝による干渉や禁止があったからといわれている。清朝はオボー祭りとナーダムに深く関与した。オボーの祭り方も清朝時代に定まった。ナーダムは、旗（ホショー）やソムといった行政単位ごとにおこなわれ、ハルハ四アイマグ（＝盟）全体のナーダムもおこなわれた。清朝はモンゴル人の団結を恐れ、オボー祭りという宗教的な目的のためのみにナーダムの開催を認めた。

モンゴル国では社会主義の時代オボー祭りは禁止同然となったが、いくつかの地方では隠れて祭ってきた。

### ◉アルヒと宴

夏営地には、川に沿っていくつものゲルが点々と立てられる。分散した家がそれぞれの春営地から川筋に集まってくるのである。川筋の家々が集まって、フェルト作りなどの共同作業もおこなわれる。ツァガーン・モド投げという、木の短い棒を一人が遠くに投げそれを大勢で競争して見つける遊びがおこなわれることもある。

夏は酒と宴の季節でもある。

夏から秋にかけては草の育ちがよく、一日で消費される以上の乳がしぼれる。ヒツジ・ヤギ、ウシの乳は熱せられて一晩おかれ、まず乳の表面に浮いた脂肪の膜を取る。そのあとの乳を大きな容器に入れ、また一晩おくと

タラグというヨーグルトになる。今度はそれを革袋に入れて攪拌し、アイラグを作る。そのアイラグを蒸留してアルヒという酒を作り、残ったたんぱく分の水気を切り、ゲルの屋根の上で天日で乾かして冬の保存食とする。

乳製品はそれぞれの段階ですぐに消費される以外は、つぎの段階に回される。

こうしてできたアルヒは、何かの祝いや接客、正月用にとっておくもの以外は、運搬も手数がかかるので、夏と秋に大部分が消費される。客が来た家では、かならずアルヒでもてなす。夏は人が集まっていて、しかもアルヒがふんだんにあるから、結婚式、子どもの断髪式のシーズンでもある。女性は乳しぼりに忙しいが、男性はタルバガン狩りのシーズンが始まるまで、これといった仕事もない。昼間からアルヒを飲んで家々をうろつく男たちをどこでも見かけるようになる。

**◉秋――黄金の季節**

秋は一年のうちで最も豊かな時期だ。夏のあいだ川筋に集まっていた家々は、それぞれ、家畜を入れずに確保しておいた草地、すなわち豊かで暖かな秋営地に移っていく。家畜は体力をつけ、乳も夏より濃くなる。野苺（のいちご）などの実もなる。草原も黄金に色づき輝きはじめる。

この豊かな黄金の季節に感謝をささげるため、秋にオボーを祭る地方もあった。

同時に、秋は長く厳しい冬への最後の準備の時期でもある。家畜をよい草場に入れて太らせ、冬に向けての準備の仕上げに入る。そしてしだいに冬が近づいてくる。ウマの搾乳はいつのまにか終わり、ヒツジ・ヤギの搾乳もしなくなり、ウシの乳しぼりも朝夕二回のペースが一日一回だけになる。

**◉冬――耐える季節**

冬がいよいよやってくると、秋営地から冬営地に移る。冬営地は寒風を避ける山の陰などが選ばれる。

ここでまずする仕事は、冬の食糧の確保である。一家で一頭から多い家で二頭のウシ、五～六頭のヒツジを屠殺する。この時期一一～一二月以降は家畜はやせるばかりだし、屠殺して解体した肉は、すぐに冷凍状態になって保存できるからだ。

しばらくは、内臓といっしょに煮られる胸骨や首、腰の部分の肉が、毎日のように食卓に上る。しかし、屠殺のシーズンが終わると、すべてに切りつめたぎりぎりの

生活がやってくる。

冷気の中でのヒツジ・ヤギの放牧は、ウマにじっと乗っていると凍えるので、体が暖まる徒歩で行く場合も多い。凍りついた水飲み場の氷を割って、家畜に水を飲ませる作業もある。人の飲み水は、氷や雪を解かして作ることが多い。

それに何といっても重要なのは、燃料となる牛糞の確保。よく乾燥した牛糞は紙粘土のように地面に丸く張り付いている。それを拾い集める。冬に燃料がなくなることの恐しさは、言葉では表現し難いほどである。とくに雪が降りそうな天気の日には、必死で牛糞を集める。雪の中での作業は大変だし、だいいち牛糞が湿ってしまい使い物にならなくなる。吹雪の中、燃料なしで過ごすことは考えられない。

ヤクを屠殺し、冬の食糧を確保する。肉はたちまち凍りつく。

朝起きると、子ウシをつなぐロープのあたりに落ちている新しい牛糞も集めて、山にして積みあげておく。これは来年からの燃料となる。新しい牛糞はかちんかちんに凍ってずっしりと重たい。それをズダ袋につめて運び積み上げて山にする。

そんな作業が春までずっと続くのである。

冬の間は、年中行事と呼べるものはない。春の兆しが現れ、恵みの夏への期待が芽生えるまでは。

**◉遊牧生活の豊かさ**

遊牧生活は、一種の貴族主義だ。彼らは自分たちの生活にスノッブなほどの誇りと自信を持っている。そこには、われわれが想像するような「悲惨さ」は微塵もない。自然の色と音を聞き分け、自分の能力を最大限に生かして、充足した生活を送っている彼らは、たしかに選ばれた人間たちといえる。むしろ彼らは今、自らの「豊かさ」とわれわれの押し付けようとする「豊かさ」のギャップに、引き裂かれようとしているのではないだろうか。

コラム

# 動物性食糧は豊かさの証明？

前川　愛

第二次世界大戦中、日本の食糧事情が悪くなってきた頃、大阪外国語大学にモンゴル語を教えに来ていたモンゴル人の先生は「マフグイ（肉がない）」と言って、モンゴルに帰ったそうである。モンゴルの食生活は、かほどに肉と乳なしでは成り立たない。

表1の通り、モンゴル人はエネルギーの四四・七％を動物性食糧から摂取している。これは一九九二年のFAO（国連食糧農業機関）の資料によると、世界一三四カ国中、デンマークの四六・六％に次ぎ、世界第二位の値である。摂取たんぱく質のうち、動物性比率もアイスランドの七七・〇％に次ぎ世界第二位で、他のアジア諸国と比べてきわだつ特徴である。

FAOは、国が豊かになると、脂肪から摂取するエネルギーが増え、たんぱく質は植物性から動物性へ変わるとしている。実際、日本は一九五〇年の動物性比率二五％から二倍以上に割合が増えている。モンゴルはこれに当てはまらず、動物性食糧の比率が高いのは、伝統的食生活のためで、新しい変化によるものではない。むしろ野菜などの摂取が、これから増えていくのだろう。

モンゴルといえども、ウランバートルでは馬乳酒にあまり出会わない。このように、都会と草原では食べ物に違いがある。都会ほど乾しうどん、パンの消費が多く、田舎ほど肉、乳製品を多くとり野菜が少ない（表2）。さらに項目の多くが肉と乳製品であることからも分かるように、やはり家畜からの生産物に多くを依っている。

| | 熱量(kcal) | でんぷん質食料の割合(%) | 動物性食料の割合(%) | たんぱく質(g) | 動物性たんぱくの割合(%) | 脂質(g) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| モンゴル | 1,880 | 44.5 | 44.7 | 69.0 | 68.6 | 71.8 |
| 日本 | 2,736 | 44.8 | 23.0 | 87.9 | 57.0 | 80.4 |
| 中国 | 2,683 | 74.4 | 12.9 | 67.4 | 23.6 | 51.9 |
| 韓国 | 3,032 | 55.4 | 14.7 | 86.4 | 37.8 | 72.1 |
| インドネシア | 2,751 | 71.8 | 3.9 | 60.5 | 15.4 | 50.5 |
| ベトナム | 2,240 | 80.4 | 7.9 | 52.1 | 21.1 | 28.1 |
| タイ | 2,333 | 62.3 | 10.3 | 54.3 | 35.4 | 43.4 |
| ネパール | 1,956 | 78.4 | 6.7 | 50.1 | 14.6 | 28.5 |

表1　1人1日あたり供給栄養量　1992年
(注) 栄養量にはアルコールは含まない。でんぷん質食料は、穀類、イモ類、でんぷん類の合計。動物性食料にはすべての動物性油脂類を含む。
『世界国勢図会 96－97』より

| | 単位 | 首都 | アイマグの中心 | ソムの中心 | 草原 |
|---|---|---|---|---|---|
| 全種類の肉 | kg | 3.9 | 4.4 | 5.2 | 5.9 |
| 内臓 | g | 120.0 | 160.0 | 240.0 | 280.0 |
| ハム | g | 190.0 | 80.0 | — | — |
| 脂肪 | g | 80.0 | 180.0 | 400.0 | 400.0 |
| 乳 | L | 2.1 | 1.7 | 2.4 | 4.4 |
| 粉ミルク | g | 20.0 | 20.0 | — | — |
| クリーム状の乳脂上質バター | g | 100.0 | 20.0 | — | 0.12 |
| 全種類の小麦粉 | kg | 3.4 | 6.1 | 6.2 | 6.8 |
| 乾うどん | g | 360.0 | 100.0 | 20.0 | — |
| パン | 個 | 5.6 | 2.0 | 0.2 | 0.1 |
| 小麦の焼き菓子 | kg | 0.4 | 0.3 | 0.2 | 0.1 |
| 全種類の穀類(キビ・米等) | kg | 0.7 | 0.7 | 1.7 | 0.7 |
| 粉砂糖・角砂糖 | kg | 0.5 | 0.5 | 0.3 | 0.1 |
| 固い砂糖 | g | 120.0 | 120.0 | 175.0 | 125.0 |
| 卵 | 個 | 0.2 | 0.1 | — | — |
| じゃがいも | kg | 1.4 | 0.8 | 0.3 | 0.0 |
| 野菜 | kg | 1.0 | 0.4 | 0.2 | 0.1 |
| アルヒ・果実酒 | L | 0.4 | 0.4 | 0.3 | 0.1 |

表2　一世帯の食料品の消費　1996年
(注) 家庭外での消費は含まれない。毎年はじめの5カ月の平均。
『モンゴル経済・社会状況解説』モンゴル統計局、1996年より

# 私たちはずっと反逆者（ドルゴル）といわれ、おさえつけられてきた

小長谷有紀

## ◉モンゴルへの移住

彼女の名前はドルゴル。一九一四年、卯年生まれ。誕生日は書類上、一〇月二〇日ということにしてある。秋の宿営地に滞在しているときに生まれたと聞かされていたので、だいたいそんなことだろう、というわけである。数えで、八三歳になる。

「言われてみれば、八三だわ。いつのまにか、そんなに歳をとったんだねえ。これまで考えてもみなかったよ、自分の年を……。ほんとに八三だなんて。びっくりするよ」と快活に笑いながら、彼女はみずからの人生を語りはじめた。

生まれ故郷の名はヤローナという。ブリヤート人の彼女が家族とともにモンゴル国に入境したのは一九二三年。彼女がまだ九歳の時だった。

最初はまず父方の祖父が、当時ボグド・ハーン・フレーなどと呼ばれていたウランバートルに南下し、一年あまり住んでいたらしい。しきりにウランバートルやモンゴルの豊かさについて情報を提供し、移住をすすめるのだった。

「毛皮があれば家畜と交換できる。一枚のヒツジの毛皮があれば、子ヒツジつきの母ヒツジに交換できる。おまえのようによく働く牧民なら必ず豊かになれる。モンゴルに行って富裕になろう」

そんなふうに祖父がしばしば両親に話していたのを、六〜七歳だった彼女はよく覚えている。

ヤローナのブリヤート人はみな貧しかったという。彼女の家にはウシが一〇頭いて、これはとても多い方に属した。だが、モンゴルではものの数ではない。それほどブリヤート・モンゴルは、ハルハ・モンゴルに比べて貧しかったという。彼女の父はロシア語に堪能であり、それゆえに村役場の仕事を手伝っていたらしい。ロシア革命前夜の南シベリア。そこには赤軍もやってきたし、白

軍もやってきた。彼女たちにとってみれば、どちらも同じくウマを徴発するロシア人であったという。彼女の父は通訳をして、ロシア軍のためのウマを用意した。

「チタには日本人もいたよ。私自身は見たことがないけど、なんでもウマでも追いつけないほど早足だって。足に球がついているって。それでどんな人たちかと不思議でしょうがなかったねえ。母さんがとっても器用な人だったから、衣服や靴をたくさん作って、それを父さんがチタで売っていた。あるとき、日本人の作ったという刀(かたな)を父さんがチタから買って帰って来たことがあったっけ。建物の上にもまた建物を建てるというのにも驚いたもんだけど、今から思えば二階建てってことだよねえ」

わずかな家畜を元手に遊牧をする一方で、チタとの間を往復して現金収入を得ていた彼女の一家は、やがて祖父の勧めに応じて、豊かな牧民になるために南下することを決めた。ロシア革命後にシベリアを去り、モンゴル国の住人となるのである。まず父親がセレンゲ県のバルジンというところへ移住し、モンゴル国籍を取得して三年後、近隣の四、五家族とともに、馬車に乗り、家畜を追って、ヘンティ県のセルーンに移住した。

ドルゴル。

「そこは、すばらしい草地だった。最初は木をたてかけただけの小屋で生活を始めた。やがてみんなで寺院もつくり、僧もいて、ごく普通に遊牧民として暮らしていた。それなのに……」

**◉粛清の恐怖**

ブリヤート人に対する粛清が始まったのは一九三二年であるという。スターリン時代、革命後にソ連を去ったブリヤート人は反逆者ないし危険分子とみなされ、男たちはことごとく逮捕され、処刑された。彼女の父が最初に逮捕されたのは、三六年だった。

「まだらのウマに乗った人がやって来て、父さんを連れて行ってしまってから、まったく音沙汰がなくなったんだよ。母さんはセルーンで農業をしていたから、出るに出られない。それで私が、ウランバートルに出ていろいろと尋ねてねえ。国営農場の仕事に連れて行かれたってことがわかった。一年後のことだよ。弟は軍隊に行ってたし、私が父さんに会いにいった」

ブリヤート人は森林資源の豊かな草原に暮らしてきた遊牧民であり、木工に巧

みである。その住居も、天幕ばかりでなく、自ら材木を切り出して固定家屋を併用する。その才能が利用されて、国営農場における施設の建設にかりだされたのであった。

元来じっとしていられない性格だという彼女が、父を探し出し、第二のふるさとであるセルーンに無事に連れ戻した。このとき、彼女は二二歳。すでに嫁いでいた。同じブリヤート人で、他の地方からやってきていた一歳年上の男性と、一八歳のときに結婚していた。父が行方不明になってからというもの、彼女は反逆者の娘としてさげすまれた。

「義理の両親が言うんだよ。反逆者の子だって。私たち夫婦のあいだでは問題はなかったんだけど、子どももいなかったしね。家へ帰れば……と言われて、帰ったまでさ」

こうして彼女は離婚して、再び両親とともに暮らし、一九三八年の春を迎える。

「最近のことは、二〜三日前のことでも覚えていられないのに、昔のことは忘れない。忘れられないよ。三月の二四日か二五日だったと思う。父さんは追われて行った。近隣の五〜六人の男たちと一緒に、まるで馬群みたいに追われて行ったんだから」

父は、妻と娘に対して、何も心配はいらない、何も悪いことはしていないのだから、すぐに戻ってくる、そう言い残して行った。そして、二度と戻らなかった。

どこかで生きているかもしれないと期待していたから、生まれ故郷のヤローナの近くまで、探しに行ったこともある。父の消息についてはまったく情報はなかった。

セレンゲ県の中心地に連行されて、直ちに銃殺されていたことを知ったのは、一九八四年のことである。彼女の父は、連行されておよそ二カ月後の五月二七日、大勢のブリヤート男性たちとともに、撃ち殺されていた。五〇歳の若さだった。

こうしてブリヤートの男たちはことごとく連れ去られ、誰一人戻らなかったという。ブリヤートの女たちは一様に寡婦となり、子どもたちは父をなくした。

### ◉一頭のウマと一〇匹のヒツジ

財産の没収が始まったのは一九三八年七月。家畜はもちろん、家のなかのものも、一切がっさい持ち去られたという。

「何が残ったか教えてあげよう。わが家には、一頭のウマと一〇匹のヒツジ。そして空っぽのうちだよ。近隣には一〇軒ぐらいあったけど、みんなどこも空っぽだよ」

死にかけている僧がいて、その人のものも全部没収されてしまった。

「ただひたすら、まっとうに生きているだけの人のものを奪っていくだなんて、そんな法がどこにある。思い出すだに、嫌気がさす。ほんとに嫌気がさす……」

そう言って彼女は唇を強くかみしめて、沈黙した。スターリンの恐怖政治は、モンゴル国の歴史に大きな爪痕を残している。とりわけ、ブリヤート人の受けた傷は深い。ブリヤート人はすべからく、反逆者というレッテルを貼られた。スターリンの指示に従わざるをえなかったモンゴル人民共和国は、彼女のようなごく普通の人びとから、生活のすべてを奪ったのだった。

「私たちはずっと反逆者といわれ、おさえつけられてきたんだよ。放浪させられた」

ブリヤート人はそれまで酒を飲まなかったのに、酒におぼれるようになったのは反逆者と決めつけられてからだと彼女は考えている。

ヘンティ県に留まっても生きてゆけないから、町にやってきたという。町とは首都ウランバートルのことである。一九四〇年に、ガンダン寺周辺の板塀地区の中のゲルに住みついた。そこは知り合いの僧の家だった。その家の主は不在。僧もまた逮捕され、銃殺されていたからである。主なき家畜があたりをうろついていたという。

彼女はさっそく縫製工場で働きはじめた。母に似て器用だった彼女が選んだ職場だった。いろいろな衣服や帽子を縫った。彼女のような器用な人なら褒賞されてもよいものを、職場でも反逆者扱いされたという。

給料はおおよそ二〇〇トゥグルグであった。当時、瓶入りの牛乳が一〇ムング（一〇〇ムングで一トゥグルグ）、パンは二五ムング、牛肉が肢体の四分の一で九トゥグルグだったというから、十分に生活してゆけるだけの給料ではあったろう。

「一九四一年に大戦が始まると、そりゃもう、昼夜の別なく仕事をした。軍服を縫いに縫ったよ。それに、贈り物列車というのがあってね。知ってるかい。一日に二着分のノルマのほかに、月に五トゥグルグ分の商品を各自で買って用意して差し出すんだよ。ソ連兵士への貢ぎものとして集めるんだ。職場で集めてね。うちの工場からはドンド・ゴビ県出身の代表者が持って行ったよね。戦争の練習もしたねえ」

### ◉社会主義化のなかで

一九六〇年、彼女の勤めていた縫製工場が国営化された。社会主義建設のための技術的基盤を確立する段階に入ったと称される時代である。以来、七三年までずっと彼女はここで働いてきた。一般に、女性は四人以上子どものいる場合は五〇歳、そうでなければ五五歳で定年を

むかえて、年金生活に入ることができる。しかし、彼女の場合はどうやらもう少し長く働くことになったようである。

現在、一九三〇年代に粛清された人びとに対する名誉回復運動がおこっている。巷の噂では、没収された財産についても、その子孫に返還されるだろうという。どのように換算されるかは、まだわからない。老いた彼女たちが望んでいるのは、罪深い歴史を認めてほしいということなのである。

一九四〇年以来、はからずも都市住民となった彼女は、草原においてその後、社会主義が人びとにどのような生活を強いたかについて、体験としては知らない。しかし、彼女はいう。

「もし、私が草原にとどまったなら、もうとっくに死んでいたろう。刑務所でね、死んだだろう」

一九五九年から、牧民の社会主義的集団化が本格的に実施された。ソ連のコルホーズに相当する、ネグデルとよばれる牧畜組合が組織されたのだった。そこでは、自由に移動することができない。決められた日時に、決められた場所へしか行くことができない。彼女によれば、こんな実例があるという。

「勝手に行きたいところへ行ったかどで、三〇〇トゥグルグの罰金を払った人の家畜は、雪害でただ一頭だけ死んだ。ところが、命令通りに移動した人たちの家畜は全滅さ。それで、罰金は全部返してもらったそうな。牧民なら、緑のある土地へゆくものだ。すると、命令に背いたといって刑務所に入れられる。私なら、確実に刑務所に入れられて、いまごろ生きてやしないね」

ネグデルの組織化によって、彼女の第二のふるさとであるセルーンは、無人地帯となった。ようやく一九八七年頃になって、いくつかの牧戸が居住するようになったらしい。

「行ってみたい気もするけどねえ。行けるなら、バルジンにも行ってみたい」

最初に父が住み着いたバルジンには、父方の親戚がいるらしい。生まれ故郷へは一九七一年に訪問して失望したが、寺院が再建されたと聞いているので、参拝しに行きたいとも考えている。そこには、父の弟の子どもたちが七〇歳代で存命であるという。

「でも、もう無理じゃないかなあ。ちょっと体力的に無理かなあと思っている」

小柄な彼女は、少し目をわずらい、少し耳が遠い。長年ミシン仕事をしてきたために背骨が痛むとはいうものの、まだまだ元気そうに見える。しかし、さすがに八〇

○キロメートル近い長旅には自信がないらしい。
いま、彼女はウランバートル市の北郊にある天幕群の一角に、孫と一緒に住んでいる。ウランバートルに来てから、ブリヤート人の男性と再婚した。子どもは、一男二女の三人。
「子どもといっても、もう六〇歳だよ。孫は、えーと、一人と、四人と、二人。亭主は死んでもう二〇年になる。六三歳だったねえ」
もちろん、ひ孫もいることだろう。最近、彼女の家に泥棒が入ったという。テレビが盗まれたものの、警察が取り戻してくれた。テレビの脇にかけていたカレンダーは戻らなかった。ウマが大好きな彼女は、競馬に出場したウマの写真から成る一九九三年版のそのカレンダーを死ぬまで大切にしていようと飾っていたのに。
「姻戚の婆さんがいてね。お互いしょっちゅう出入りしているんだけど、その人とおしゃべりするほかは、テレビを見るのが楽しみなのさ。いまは、ほら、『おしん』を見てるよ」
ブリヤート方言のせいか、彼女がいうと「おしん」が「オヒン」に聞こえる。
「去年は『黒ずんだ顔』を楽しみに見てた。最初はよかったけれど、何だかくだらなくなってしまったね。だけど『おしん』はほんとに良い。貧しい者は働かなければならないことを教えてくれるだろ」
『黒ずんだ顔』というのは、一九九五年にモンゴルで放映されて人気を博した、アルゼンチンの連続テレビドラマだという。そのタイトルから想像されるように、犯罪の匂いのするさまざまな手段で成り上がる女性の物語であった。九六年は、英語版の『おしん』からモンゴル語に吹き替えられた連続テレビドラマが人気を集めている。人気の秘密は言うまでもなく、かよわそうに見える一人の女性が辛苦を乗り越える姿にある。
人びと、とりわけ女性たちは、おしんがきっと裕福になるにちがいないと信じて見守っている。ブラウン管に映るおしんへの声援は、苦しい時代を生き抜いてきた彼女自身へのねぎらいであるのかもしれない。がんばった自分自身への声援なのだろうと思う。

◉人の一生

# 移動と人生の節目

上村　明

### ◉野性的人間

荒くれウマも耳をつかんで馴らす
くつわも鞍もなく乗りこなす
妻の愛をしっかりうけとめる
思うことを歯に衣きせず言う

俺は本当のモンゴル人
自由奔放な田舎の人間

最近モンゴル人の間で、愛唱歌の一つになっている歌の一節だ。ここには、モンゴルの男の理想像が描かれている。文明に飼い馴らされていない野性的な人間。このイメージは、モンゴル人自身にとってもけっして否定的なものではない。家畜とともに生き、自然の摂理にしたがって一生を過ごす遊牧民の誇りすら感じられる。モンゴル人のアイデンティティは、今でもこうした遊牧の生活にある。

彼らはどのように生まれ、育ち、老い、生涯を終えるのであろうか。一生のサイクルに区切りをつける通過儀礼を見ながら、モンゴル人が人生に対してどんな感覚を持っているかみてみよう。

### ◉誕生から命名へ

モンゴルの子どもたちは、もちろんおおいに歓迎されて生まれてくる。子どもをつくり育てることはモンゴル人にとって、人生のもっとも重要な目的の一つである。それに牧民家庭の生計の規模は、仕事のできる家族構成員の数によって決まるから、子どもの数の多さはほとんどそのまま家の豊かさにつながる。医療施設の整わない時代は乳幼児死亡率が非常に高く、子どもは本当に授かりものだった。

子どもが生まれて数日たつと、子どもを取り上げた産婆や親類縁者が集まって、命名の祝いがおこなわれる。まず、産婆かラマ（僧）が、濃いお茶などで赤ん坊を洗う。そして父親がハダグ（儀礼用の絹布）を捧げ「子どもに名前をお授け下さい」と言うと、甕（かめ）の中の米をかき分け、あらかじめ両親が入れておいた二～三枚の紙の中から一枚を箸でつまみ上げる。そこに書かれた名前を、男の子なら右耳に女の子なら左耳に、吹き込むように三度ささやく。客たちは、生まれた子に衣服などの身の回りの品々やお金を贈る。

最近ではこのような誕生直後の祝いは、あまりおこなわれなくなっており、子どもの名前も親が自分でつけることが多い。

小さな子どもは、この世から生まれる前の世界にいつもどって行ってしまうか分からない、半分は人間だが、半分は霊的世界の存在だ。子どもを「可愛い」とか「きれい」と何度もほめるのはタブーである。悪霊がそれを聞きつけて、さらっていってしまうかもしれないからだ。

乳幼児が病気にかかったり死んだりする原因は、闇の中にひそむチュトゥグルとか疫病を広めるアダという悪霊が、子どもの魂を連れ去ってしまうからと考えられていた。もちろん今ではこのように考える人はまずいないが、それでもたそがれ時に小さな子を外に出す時には、魔除けのため眉間（みけん）に鍋底の煤（すす）をかならず塗る。またデール（民族服）には子安貝や古銭が縫い付けられている。これは子どもを悪霊から守り、人間の世界につなぎとめる役目をはたす。

**◉断髪の儀礼**

半分は霊的世界の存在である小さな子どもの身体に人間が手を加えることはタブーだから、乳幼児の髪の毛は切らない。

男の子が三歳か五歳、女の子が二歳か四歳に達すると、その髪の毛にハサミを入れる祝いがおこなわれる。このころには死亡率の高いもっとも危険な時期を乗り越え、子どもは言葉を理解するようになっているし、物心もつきはじめる。つまり半分は「霊」の領域に属していた子どもが、完全に「人間」の領域に入る。断髪の祝いは、それを社会的に認知する儀礼といえる。

はじめに祖父かそれに相当する人間が、茶碗の乳を子どもに飲ませ、額に一滴つけ、自分も飲む。その後、祝

福の詞を言いながら、後頭部の髪の毛をひとつまみ根元から切り取り、ハサミに結び付けられた袋に入れる。そして贈り物を子どもの持つ袋に入れてやる。子どもは順に客の前をまわって、同じように髪を切ってもらう。客は「長生きし、親に孝行し、国のために働き、人びとの先頭に立って行け」などと祝いの言葉を唱え、子どもに贈り物を与える。

名付けの祝いでは、家畜を贈ることはほとんどないが、断髪の祝いでは、家畜を贈ることが多い。贈られた家畜はその子の財産として、はっきり区別される。都会では、銀行に子ども名義の口座を開き通帳を贈ることもある。つまり子どもは経済的にも、一個の人間として認められるのだ。

経済的人間になるというのは、たんに財産を持つということだけではない。同時に家の仕事や近所の家との共同作業など、生計活動に参加するということも意味する。

田舎で育った子どもなら四～五歳までに、家畜の個体識別ができるようになっている。それまで甘やかされるばかりだった子どもは、これを境に家の中の仕事や牧畜の作業を厳しく教えこまれてゆく。まず茶碗洗いや水汲み、子ヒツジ・子ヤギの群れの放牧からはじまり、大きくなるにしたがって男の子はウマの調教や牧畜の道具の作り方など、女の子は乳しぼりに料理・裁縫といった性にしたがった仕事をおぼえていく。

**◉結婚**

こうして「男」または「女」になったあと、彼らが迎える通過儀礼は結婚式である。

人民革命の前までは、親同士の決めた相手と結婚するのがしきたりになっていた。結婚した後、はじめて相手の顔を見るということもめずらしくなかった。

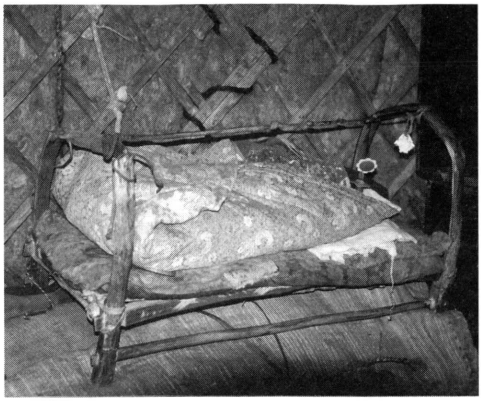
革命以後、男女同権の思想が普及し、本人たちの意思による結婚が奨励され、今ではほとんどのケースがいわゆる恋愛結婚になっている。むかしながらの親同士が決める結婚は、それが親の強制なら反革命的な行為とされた。

このような結婚制度の変化によって、結婚相手の選択の範囲は逆に狭くなったともいえる。牧民として成長すれば、生まれたソムの外に出る機会も少ないので、いきおい相手はソムの学校の寄宿舎でいっしょに生活したとか、近所でいっしょに遊んで育ったといった相手になる。

また親戚縁者が近くにいれば、牧畜の共同作業などにも有利なので、生まれたソムの中に相手を求める傾向がますます強くなる。

二人が結婚を決めると、大筋では革命前と変わらない両家の間のさまざまな手続きがはじまる。まず男性の側の縁者が女性の親の家に出向き、結婚の申し込みをするが、女性の父親は即答をさける。日数をおいて、今度は男性の父親がみずから答えを聞きに行く。女性の父親はなんらかの理由をつけて断ることもできるが、最終的には娘の意思にしたがう。もし断るときは、男性の父親の差し出した嗅ぎ煙草入れかハダグを受け取らないのが、断りの意思表示である。

女性の父親が結婚を認めると、結納の日取りが決められる。結納として、主に家畜が男性の側から女性の側に



西モンゴルで今も使われているゆりかご。

子どもの断髪式。祖父が孫の髪の毛を切ろうとしている。

贈られる。結納をもらった花嫁側では、それをベッドや寝具など、花嫁側が用意することになっている新居の品々をそろえるのに使う。花婿の側では新しいゲルの骨組みを買ってきて、それがちゃんと組み立てられるように部分部分を調整したり、家の中に入れる調度を用意したりする。ゲルの入って左側の調度は花婿側が、右側の調度は花嫁側が用意する。これらの準備に、数ヵ月から長いときは一年以上かける。

結婚式の二〜三日前くらいからは、ヒツジを屠殺してご馳走を用意するなど宴会の最終的な準備をする。前日の夜には、近しい親類など主な参加者が集まって、飲めや歌えの宴会が始まり、結婚式当日にはすっかりでき上がっているということもめずらしくない。

結婚式は、花嫁側で催される宴会と、花婿側の宴会との二つに分かれる。断髪の儀礼もそうだが、モンゴルのめでたい儀礼には酒と歌が欠かせない。儀礼は宴の中で進行される。儀礼の合間に酒杯が何度もまわり、歌が全員で歌われ、参加者の一体感が盛り上げられる。

結婚式の当日朝早く、花婿をはじめとする奇数の数の花婿側の人間が、花嫁の家に行く。そうして花嫁の家で宴をしたのち、花嫁側を含む偶数の数の人間が、花婿の家に向かう。父親は残り、母親や花嫁の介添え役の女たち、花嫁側の親族の代表たちが花嫁について行く。花嫁とその一行は、花婿の親のゲルの隣にたてられた新居のゲルに入る。

花嫁はまずお茶を煮て、上座にすわった目上の者から順にふるまっていく。お茶を煮るのは、主婦のいちばん基本的な仕事である。次に、用意してあった食事をなべで温めてふるまう。乳も茶碗で給仕される。

それから上座の両親をはじめ目上の者たちに、布地などが新郎新婦から贈られる。そうすると上座の一人が、ゲルのトーノ（天窓の枠）からのびたロープにハダグをむすびつける。こうしてこの家を社会的に承認する。それが終わると目上の者から新郎新婦に贈り物が渡され、参列者たちもそれぞれ贈り物をする。

しばらく宴が続くうち、新婦の側の人たちは帰っていく。

モンゴルの結婚式での新郎新婦は、ひたすら奉仕の側だ。両親をはじめとする目上の者たちに育ててもらった感謝の心を表わし、独立した家として生活していけるこ

とを証明することが結婚式の意味である。

**◉家族と家畜**

新しい夫婦は、生計の単位となる。モンゴルの家族は、いわゆる核家族だ。新婚夫婦は親のすぐ横にゲルを立てて住んでいても、食事は別々に作る。また親の家畜と統合して一つの群れとして管理していても、所有は別であるし、一頭一頭はすぐに分離できるように、耳切りや焼印のほかペンキなどで印が付けられている。

牧地でのヒツジ・ヤギの群れの管理というのは、効率的に草を食べさせながら、群れが分裂してしまったり、ほかの群れといっしょになってしまわないようにすることが主な仕事だ。群れが分裂してしまうと、一人では見張りきれなくなり、いなくなった家畜を探す仕事がふえる恐れがでてくる。ほかの群れといっしょになれば、それを仕分けするのに、半日か、へたをすると一日仕事になってしまう。こういう予定外の仕事ができると、それからの作業のローテーションにも響いてくる。

ヒツジ・ヤギの群れの管理できる規模は、季節や牧地の草の状態によって変わる。夏や秋は草の密度が高く、群れの規模が大きくても管理しやすい。だが、冬と春は草がまばらで群れの移動が速くなり、家畜の管理が面倒になるため、管理できる群れの規模が小さくなる。また規模の大きな群れの管理は、子どもの手には負えない仕事で、おとなの人手をとってしまう。そもそもヒツジ・ヤギの群れの牧地での番は、一日も欠かすことのできない仕事なので、誰か一人は番に出なくてはいけない。

だから牧民にとって家畜の数が多いのは、けっして手放しで喜べることではない。牧民が自分の家だけでヒツジ・ヤギの放牧をおこなうのは、所有頭数が多く、人手も十分にあるまれなケースといえる。ふつうそれぞれの持つ家畜の数や構成・人手によって、ほかの家族といっしょにヒツジ・ヤギの群れを一つにし、その近くにゲルを立て、群れの番のローテーションを組む。こうすると一つの家族だけで毎日ヒツジ・ヤギの番を出さずにすみ、人手の節約ができるからだ。またほかの作業も共同ですることができる。

結婚して一年くらいは、親の隣にゲルを立てることが多いが、家畜が殖え、いっしょに放牧しやすい規模を超えたら、ほかの家族の隣に移っていく。

どの家族と共同するか、つまりいっしょの営地に住ん

でヒツジ・ヤギを一つの群れにするかは、それぞれの家族の選択の自由にまかされている。それぞれ独立した移動式の住居ゲルをもち、独立した財産である家畜をもった家族が、くっついたり離れたりすることによって、気候の変化やほかのさまざまな条件の変化に即座に対応して、牧地を効率的に利用することができるのである。

結婚とはそんな組み合わせの単位が一つふえ、共同体の協働の選択肢がひろがるということだ。結婚の祝いは、だから新しい生業の単位の社会的な認知であるとともに、共同体全体の祝いでもある。

**◉子どもをもつということ**

この単位は、新しい共同体の成員を作る再生産の単位でもある。結婚当初は、親のそばで仮のゲルに住み、子どもができてからちゃんとしたゲルを立ててもらう習慣のある地方もあった。つまり子どもがなければ、一人前の家族とは見なされなかったのだ。子どもがなかなかできなければ、養子をもらうことにも抵抗感がない。養子がいる家は、今もめずらしくない。

子どもがない家はじっさい大変だ。ヒツジ番は毎日必要だし、そのほかに家畜を探したり連れてくる仕事、冬や春の営地の囲い作りなどなど、男のやる仕事は一人だけではとてもこなしきれない。女の仕事も、乳しぼりや家事など、毎日しなければならない仕事が数え切れないほどある。子どもは一人前になるにしたがって、親の仕事を肩代わりしていく。そうして家畜の数も増え、弟妹が自分の代わりができるようになると、結婚し家畜を分けてもらって親から独立する。

モンゴルの財産相続の一般的な形態である、末の子が親の財産を継ぐ末子相続は、このように上の子から独立していくことの自然な結果だ。最後に残った子どもが、親と親の財産の面倒を見ることになるのである。

モンゴルでは、年寄りが尊重される。田舎の生活のテンポも老人にあっているから、都会に住む若者の中にも年を取ったら田舎に住むんだと老後の人生設計を話すものが多い。

**◉葬式**

子どもたちが成長し、これらの儀礼を親として何度も経験するうち、人は老いていく。

人が亡くなると、家の中を片づけ、男性だったらゲルの西側、女性なら東側に安置して、死後硬直のはじまる

前に姿勢を直してやる。西向きに横たわらせ、右手の親指で鼻の穴をふさぎ、左手は体にそってのばし、左足は心持ち曲げ右足は伸ばす。これは獅子の寝そべっている姿だといわれている。

ゲルの天窓の覆いをふさぎ、いつもはゲルの上を右回りに渡して留めているそのひもを左回りにまわしてゲルの横で留める。

親戚縁者や生前付き合いのあった人たちが、死者に最後の別れを告げに集まる。こうして何日かは家の中に安置し、月・水・金曜日のいずれかに葬る。

モンゴルでは、ふるくは一般に土葬がおこなわれていたが、チベット仏教が普及してからは死体を埋めず、野にそのまま置くようになった。社会主義の時代になると、棺桶に入れて土葬する習慣が広まった。最近、埋めずに野にそのまま置いてくる方法も地方で復活しつつある。

これは次のような手順でおこなわれる。弔いの行列は、

水汲みは子どもの仕事。冬は川の氷を割って運ぶ。

フェルト作りは、近所の人総出でおこなわれる。

早朝出発し、あらかじめ決めておいた場所に着くと、車に積んできた死体をおろす。運搬など死体に手を触れる人間は、帽子を後ろ向きにかぶり、デールの裾をはしょって帯にはさみ、襟やそでを内側にまくり込む。

死体を地面の上に安置したあとは、後ろを振り向かず家に戻ってくる。そのとき出ていったときとは反対の方向からゲルに近づき、ゲルのかたわらで焚いた火の間を通って、死者を葬った方向を向いて水で手を洗い、次にゲルに向いて乳を入れた水で手を洗って紙で拭く。

ゲルに残っていた人間は、ゲルを立て直し、乳製品や米などの食事を用意して、野辺送りから帰って来た人びとを迎える。葬列に参加した人たちには、糸と針、マッチなどが配られる。

四十九日の過ぎるまでは、近親者は晴れ着を着たりせず、喪に服す。昼間からゲルの天窓を閉め、そのひもを左回りに留めること、また帽子を反対にかぶったり袖を内側に折り込むなどの死体に手を触れる人間の身仕度、また手を洗ったあと紙でぬぐうといった行為は「死」を日常から分かつ仕掛けなので、葬式以外でするのは、タブーだ。

**◉遊牧と人間**

かつて訪ねたところに時間をおいて行ってみると、以前元気に話をしてくれた老人が亡くなっていたという経験が何度かあった。老人たちは死ぬ直前まで、牛糞拾いや縄作りをしていたという。寝たきりのすえ、亡くなったという老人の話は聞かない。生きている間は、何かしら仕事をするのが当たり前だ。遊牧が、彼らの生活そのものだからだろう。

遊牧は動物を相手にする。植物のように動かないものを相手にして、冬のあいだはこれといった仕事のない農業とは違う。毎日待ったなしの機転と決断が要求される。教えられたマニュアルどおりにはいかない。知識はもちろんだが、その運用はもっと大事だ。そんな生活が、たいていのことは一人でこなしてしまう不思議な能力のモンゴル人を作り上げる。

遊牧の生活は何世代何十世代と基本的な変化なく受け継がれてきた。モンゴルでは墓碑を立てる習慣がなかった。今もそんなものは必要ないと彼らはいう。モンゴル人は、子や孫、その孫たちによって大地の上に自分という存在のエコーがいつまでも鳴り続けると思うのだろう。

◉自然環境

# ままならなさと豊かさ

山崎正史

## ◉降っても降らなくても困るもの

モンゴルの遊牧生活の舞台は、国土のおよそ八割を占める草原である。ここでは年降水量がおしなべて四〇〇ミリメートル以下と少なく、降水量のわずかばかりの変動が、生活に大きな影響を及ぼすことがある。

例えば一九九三年の春、西部を大雪が襲った。この時は、一メートルほどの積雪により、家畜が蹄（ひづめ）で雪をかいて枯れ草を食べることも、人が雪をかいて家畜に草を食べさせることも十分にできず、モンゴル語で言うゾド（雪害）となった。陸路が遮断されたためにヘリコプターを用いて飼料や食料などが運ばれたが、五〇万頭を超える家畜が斃死したと伝えられる。

また例えば一九九六年の春、北部で火災がおこった。雪の少ない暖冬が二年間続いて乾燥が著しく、火がひとたび燃え上がれば他に移るのが速くて、消火ははかどらなかった。結局、火災は四カ月近くにもわたり、森林二四〇万ヘクタールと草原七八〇万ヘクタール、あわせて一〇二〇万ヘクタールを焼いた。避難ができる人・ゲル・家畜への直接の被害はそれほど大きくなく、斃死した家畜は七八〇〇頭とされる。しかし「足」を持たない家畜小屋・井戸・電柱などの多くが失われた。ここ十数年はなかった規模の火災であった。

夏に雨が降らなければ、ガン（干害）になる。草は伸びず、日ごとに増す暑さのなか、その影響を最も強く受ける家畜はヒツジ、そしてヤギである。ガンになれば、「水と草を求めて移動する」という遊牧生活の本質的な面が、はっきりと現れる。

遊牧が、一般に厳しいとして知られるモンゴルの自然にうまく適応した生活形態であることは、よく知られている。一方で遊牧生活がわずかの気候変動に大きな影響

を受けるほど微妙な、脆(もろ)い基礎の上にあることを、とりあえず簡単に理解をしておこう。

### ◉アジアの中のモンゴル

遊牧生活をとりまく自然環境を、他のアジア世界のそれと一般的に比べる視点で、見ることにする。

モンゴルは「アジアの片田舎」だと言われることがある。このことは何も社会的・文化的な側面のみに限らない。気候・風土とこれらをつくりだす仕組みは、東～東南～南アジアの生命力が溢れる熱帯雨林地域や亜熱帯・温帯モンスーン地域のものと、さらに西南アジアの乾燥地域のものとも区別される。

少し具体的に述べよう。

地形図を用いてアジア全体を鳥瞰した時に、誰の目にも特徴的に映る二つのことに関連させて、アジアの気候・風土がおよそ説明できる。第一に、アジア大陸の大半が北半球に位置し、赤道付近には海域が大きく広がる。赤道付近の熱帯は、太陽により強く加熱される。また海流が、赤道付近では東から西に流れ、その間に暖められるために、熱帯西部太平洋の海水温が世界で最も高い。よって熱帯では、年間を通して水蒸気を多く含んだ上昇気流が卓越し、雲が発生して降水量が多くなる。この大気の流れを補うべく、熱帯の北と南では大気が下降して赤道付近に流れ込み、その地域に乾燥をもたらす。また地球の公転面に対する自転軸の傾きは、強く加熱される緯度を季節的に変化させる。こうして、熱帯をはさんで南北に、雨季と乾季をもつ亜熱帯の気候ができあがる。

第二に、ヒマラヤ山脈とチベット高原をはじめとする長大な山塊が海抜四〇〇〇メートルを越えて高くそびえる。ここではこの山塊をまとめてチベット高原としよう。比較的低緯度の対流圏中層に横たわるチベット高原では、空気が薄く、夏は草木のまばらな地面が強い日射を吸収する。そして地面はこの上の大気を強く熱し、持続的な上昇気流が生まれる。この流れを補塡するように、下層では南側から湿った風が吹き込む。こうしてチベット高原はインド北部を中心としたモンスーン低気圧の形成に大きく関わり、南麓には世界有数の多雨地域ができる。また、チベット高原の東西には多くの深い渓谷が見られる。東側のそれは黄河・揚子江・メコン河など、西側のそれはガンジス河・インダス河などの大河の源流である。いずれの大河も、降水量をはるかに超えた湿潤さや肥沃

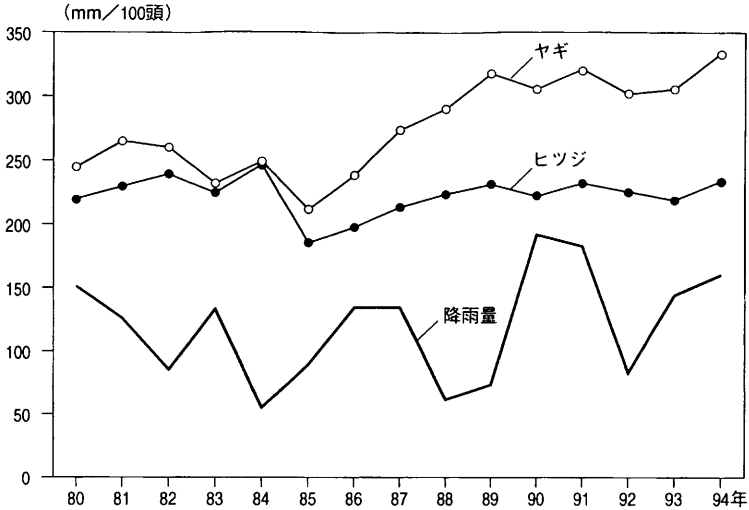



図1　ウムヌゴビ県ボルガン郡における、降水量とヒツジ・ヤギの飼養頭数の年次変化。2〜3年に一度ほど、年降水量が50〜70mm程度に落ち込んでいる。それらの年またはその翌年には、ヒツジ・ヤギの頭数も減少する傾向がうかがえる。この郡は、現在5つの地域からなり、通常の年ならば、個々の遊牧民世帯は一つの地区の中で生活する。しかし雨が少ない年には、他の郡・県までも移動する。

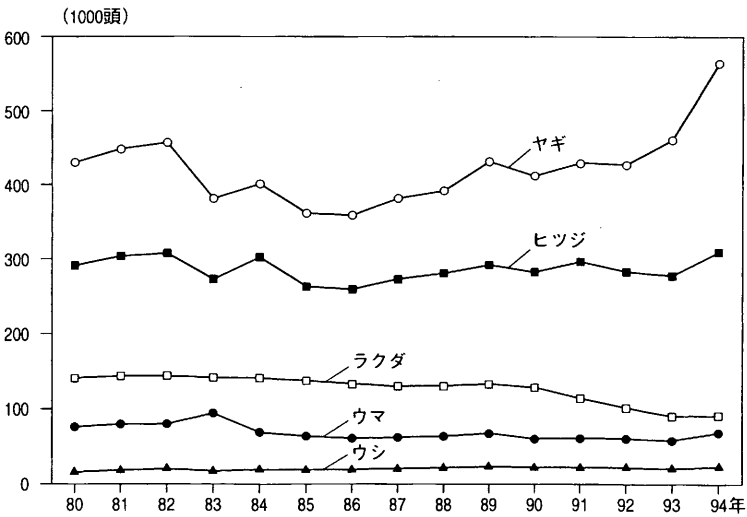



図2　ウムヌゴビ県における家畜飼養頭数の年次変化。ゴビでは、ラクダとヤギが比較的多く飼養される。ここ数年は、ヤギが著しく増加している。

さを流域にもたらし、洪水をも引き起こすもので、チベット高原が、亜熱帯〜温帯のより低地に対する水のタンク・ポンプとなっているのがわかる。一方、暖められて上昇した大気は、対流圏上層から周囲に強い気流として溢れ出る。この気流は西南アジアやアラビア、さらに北アフリカで下降し、これらの地域の乾燥化の一因となる。

アジアの比較的低緯度な地域では、インドを境にして、東の湿潤（熱帯雨林・モンスーン）、西の乾燥というコントラストが認められる。これは陸海配置、そしてチベット高原と太平洋の影響によってつくりだされたと言える（安成哲三『熱帯とモンスーン』「講座東南アジア学二・東南アジアの自然」一九九一年、参照）。

しかしモンゴルには、以上のような大気と水の激しく大規模な循環が、南西遠くのチベット高原そのものと西側をかすめる大シアンリン山脈などによって妨げられ、到達しない。外から流れ込む大河もない。

モンゴルでは、降水が夏に集中している。夏には、太陽に熱せられた大地が大気を熱し、上昇気流が卓越するからである。午後にはあちこちに入道雲ができて土砂降りとなり、三〇分から一時間も経てばサッとあがることが多い。

冬、モンゴルからシベリアまでの大地は、放射冷却により冷やされる。そして大地が空気を冷やして下降気流が卓越するため、カラッとした晴天の日が多い。この寒気は、チベット高原により南方への出口を阻まれ、勢力が強化されて寒さをつのらせる。気温はマイナス三〇度があたりまえ、時・ところによってはマイナス六〇度以下の極寒となる。また、遠く北氷洋・シベリアから、わずかばかりの湿気が至れば降雪となる。空一面に暗い雲が広がり、やがて粉雪が舞う。強い風を遮る山々から遠いところでは、降った雪が強風にあおられて舞い上がり、視界はきわめて悪い。

モンゴルは、他のアジア諸国とは異なる内陸の、そして北の国である。ただし、単に巨大な大陸奥深くの比較的高緯度に位置しているという以上に、少ない降水量と冬の寒さに特徴づけられる気候が必然となり、農耕に不向きな草原が成立している。

さて、地殻が固定したものではなく、常に変化しているものだということは常識である。しかしモンゴルは、その変化が著しいアルプス・ヒマラヤ造山帯や環太平洋

造山帯から遠く離れている。火山がもたらす農耕に適した肥沃な土壌や、日常的に地震に悩まされる生活はない。地殻は老年期を迎えて強く安定し、風化・浸食・堆積を受けるのみであり、地表の起伏は少ない。さらに草原では、秋から春にかけては荒涼とした印象を与える薄黄が、そして、初夏にはほんのひと雨によって一挙に緑が広がる。草原のモノクロームな世界は、他のアジア世界と比べると単調さ自体がより強烈なインパクトとして映る。

雨が続けば、砂埃の吹き溜まりはぬかるむ。草木の少ない土地は保水力が劣り、川は広い地域の降水を集めてすぐに溢れる（1990年夏、中部のバヤンホンゴル県中心地近く。下に見えるのは、モンゴル・日本共同調査隊のテント）。

次に、先の地図よりさらに詳しい、モンゴルとこの周辺の地形がありありと見てとれるものを広げてみよう。そうすればこの北の国が、一面では北に向いた国でもあるとの理解がうながされる。

シベリア南部からモンゴル南西部にかけては、いくつかの山脈が、およそ南に湾曲して何重にも連なる。バイカル湖が南東に弧面をもつ三日月形となるのはその現れであり、山脈と山脈の間隔は南ほど広く、地形は全体として北高南低、西高東低となっている。山脈は、夏には平地以上に雲を生み、冬には北からの湿った風を受けて雪を降らせ、ここでも水のタンク・ポンプとなる。

とりわけ重要な山脈は、中北部を半円形に囲むようにして走るハンガイ山脈とヘンティ山脈である。これらを源として北へ流れる多くの川は流域を潤し、さらに広い範囲での降水を集めながら、国境近くで一つに合流する。そしてバイカル湖に注いだ後、シベリアの低地を流れて北氷洋に至り、水は大規模な循環の輪を閉じる。また、より小規模な循環として、地表の水の豊富さは夏の豊富な降水につながる。こうして、半円形に囲まれた中北部

ではモンゴルの中で最も水に恵まれ、良好な草地が広がっている。モンゴル帝国の首都カラコルムや、現在の首都ウランバートルはこの地にあり、古くから遊牧の先進地域であった。

二つの山脈がこの内側にもたらす湿潤は、外側に対しては乾燥となる。植物種とこれによる地表の被覆のようすをあらわす植生は、まずは内側の森林性草原を中心として、ステップ（草原）と砂漠が、それぞれの中間帯を介して帯状につながる。

また、西部には山脈があるため気候が比較的冷涼で、南～東部には平原が広がる。川は合流することが少ない。西部では内陸湖に注ぎ、南部では短くすぐに砂漠に消えて外海に達せず、西北部のもののみが東の太平洋まで流れる。よって植生は、西部で再び森林性草原が出現して砂漠帯が狭くなり、東部にはステップが大きく広がる。

モンゴルの地域性は、伝統的にハンガイ、ヘールタル、ゴビと大きく三つに分けてとらえられる。この区別を、植生に応じてそれぞれ森林性草原、ステップ、砂漠を中心とした地域と考えてよいし、およそ北がハンガイ、南がゴビ、これらの中間帯がヘールタルと理解してもよいだろう。自然環境の地域性をごく大まかにとらえれば、水の大規模な循環の輪の中にある北のハンガイではよく、南のゴビでは厳しい。モンゴルが北に向いた国だと言える理由がここにあり、ゴビは「片田舎」になる。

ただし、必ずしもそう言えない面もある。ハンガイでは火災やゾドが多い。ゴビでは火災・ゾドは少ないが、ガンが多い。また、家畜は塩類を適当に摂取する必要があり、土壌中の塩類が地上に析出したホジルはゴビで多く得られて、時にはハンガイまで運ばれる。硬貨の表と裏のように、自然環境の長所と短所は切っても切り離せない関係にある。

**◉自然環境の社会性**

今度は、まず草原で生活を営む遊牧民個人の視点から見てみよう。そうすればチベット高原、太平洋や北氷洋は遠い世界と映るであろう。ハンガイの遊牧民ならば、ゴビはあまり関係がないと思えるかもしれない。

個々の遊牧民が、まずもってよく知らねばならないことは、自らが生活を営む狭く限られた範囲の自然についてである。自然について知るという内容には次の二つがある。

一つは地勢を把握すること。例えば、冬に寒風が吹きつけないのはどこか、逆に夏に適度な風があり涼を得られるのはどこか。どこにどのような川・井戸や草があり、それらが使えない時に、代わりはどこに求められるのか、などである。

もう一つは、気候の季節変化を規則性として把握することは当然として、日ごと・年ごとの不規則な変化を規則性として把握すること。これは直接目に見えない因果関係にも踏み込むことであり、時に観念的に、時に経験則としてとらえられる。「あの山が見えなければ、明日は強い風が吹く」「寒い冬になるから、秋（冬）に口笛を吹いてはいけない」、また「巳年や申年にはゾドが多い」などである。

遊牧民が半年以上滞在する冬営地の周辺では、春になれば家畜の食べる草はほとんど残らない（1995年春、ウムヌゴビ県）。

地勢と気候の変化は互いに関連させて把握され、移動の時期、営地選定や毎日の放牧コースなどを決める大切な条件となる。

モンゴルの草原を車で移動すれば、時おり遠方に見かけるゴマ粒のような、そして近づくにつれてようやくそれとわかる家畜群には、古い知り合いに出会ったような懐かしさが感じられる。また白いゲル、とりわけ煙突から煙の出ている様を見ようものなら、人間が生活をしているということの温かさや安らぎが感じられる。これら家畜やゲルは、歴史的に集積された遊牧民の知恵と遊牧民個人によるその知恵の適用によって、自然から引き出された豊かさの証にほかならない。

しかしながら、「自然と闘って生活をつくりあげる」とか「自然の恵みを享受する」といった考え方の延長上

に、遊牧生活の将来までを見通すことができる時代は、とうに過ぎた。人間が自然にかける圧力は、昔とは比較にならないほど大きくなり、人間のための自然を保全するための努力が必要であろう。

草原に的をしぼるのが、わかりやすいであろう。草原は、ほんの一〇〇年前と比べても、かなりの変貌を遂げているはずである。この実態の把握は容易でないが、例えば次のような事実から、推察できる。

まず、今世紀初めに五〇万人足らずだったモンゴルの人口は、現在二三〇万人に達した。その増加分の多くは都市人口である。そして都市における乳と食肉の消費分や輸出分が賄えるように、全国で一〇〇〇万頭に満たなかった家畜頭数が、現在では三〇〇〇万頭近くに増えた。生産力が向上した一方で、草原の許容力は小さくなっていることがわかる。

ゆえに、同程度の天災ならば、一〇〇年前よりも現在の方が大きな被害を受けやすい。また、先の火災やガンの場合は、公表されなかった被害もあると考える必要がある。これはまず、家畜の管理・放牧が、移動に伴う制限を受けるため、そして移動した先の草原が、家畜群の密集によって疲弊する可能性があるためである。場合によっては草原の裸地化が進み、いわゆる過放牧となる危険性もはらむ。

また、市場経済の導入、家畜の私有化以降のここ数年、少し気になる変化もある。例えば、日本でもカシミヤとして知られる毛の商品価値が高いために、ヤギの飼養頭数が特にゴビでは急速に増加している。家畜は種によって採食する草種が異なるものである。そして特定の家畜の増加は、特定の草種の食い尽くしや別の特定の草種の食べ残しとなり、生態系の変化につながる。よって、草原の利用の仕方を個人の主体性に任せるのみでなく、組織的な何らかの方策が必要であろう。

遊牧生活の歴史を尋ねれば、ままならない自然と闘い、かつ調和して安定した豊かさが得られるよう、その時代なりの問題が解決された、もしくは解決が先送りされた積み重ねがみられるだろう。そして、とりわけ現代においては、生活の基盤が損なわれないためにはどうしたらよいかという問題が、解決されるべき重要なものとして立ち現れている。